

群馬大学大学院
教育学研究科案内 2017

修士課程・専門職学位課程

群馬大学大学院教育学研究科



あいさつ

群馬大学の教育学研究科は、大学を卒業してこれから教師になろうという人がさらに学びを深める場であり、同時に現在教師の職にある人が力量を高めるためにさらに学ぶ場でもあります。では、教師になるための学びと教師が力量を高めるための学びとが大学院で行われる意味は、どこにあるのでしょうか。

「教育」ということばを訓読みすると、「教える」となります。そうすると、「教師」とは子どもを教える先生、「教室」とは先生が子どもを教える部屋、ということになりそうです。つまり「教師が教える、子どもが学ぶ」。果たしてそうなのでしょうか。

「教師が教える、子どもが学ぶ」というのは一方通行の教育観といえるでしょう。現在では乗り越えられつつある教育観ですね。ここには、「教師の学び」という視点が欠けてます。教育とは双方向の営みです。教師と子どものやりとりがあるのはもちろんですが、そのやりとりを通じて教師も子どもから学びます。子どもから学ぶという姿勢をもった教師には、子どもはきっと多くのことを教えてくれるでしょう。

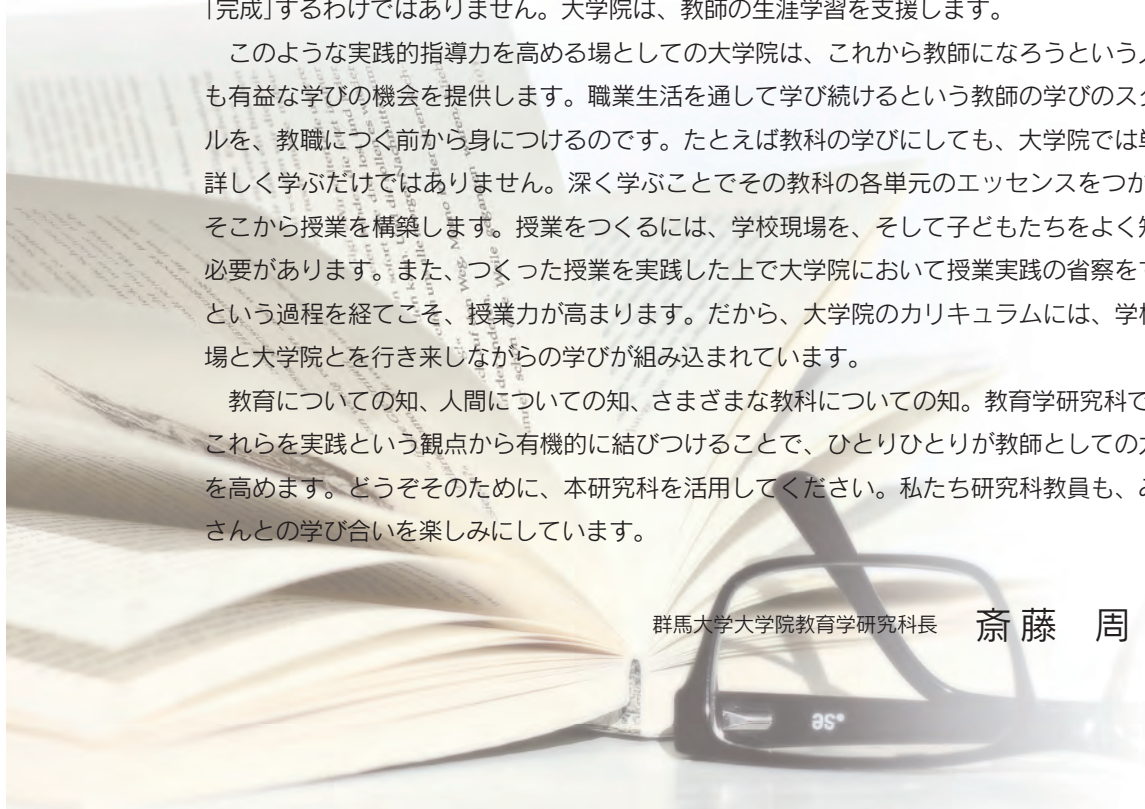
あるいは、教育は多方向の営みだといった方がいいかもしれません。子ども相互の学び合いもあるからです。教室を、子どもたちと教師の多方向の学び合いの場として組織する。教師の力量が問われる場面です。

教師は、子どもから学び、同僚からも学びます。学校現場は、教師にとって重要な学びの場です。これに加えて、外からの視点をもつことも有効です。自らの実践を、現場を離れたところから見つめ直すのです。そのような場として大学院があります。現場での実践から生じた課題を解決するために大学院で学び、大学院での学びを現場に持ち帰って実践に移す。その繰り返しが教師の力量を向上させます。大学を卒業して教職に就いた時点で教師として「完成」するわけではありません。大学院は、教師の生涯学習を支援します。

このような実践的指導力を高める場としての大学院は、これから教師になろうという人にも有益な学びの機会を提供します。職業生活を通して学び続けるという教師の学びのスタイルを、教職につく前から身につけるのです。たとえば教科の学びにしても、大学院では単に詳しく学ぶだけではありません。深く学ぶことでその教科の各単元のエッセンスをつかみ、そこから授業を構築します。授業をつくるには、学校現場を、そして子どもたちをよく知る必要があります。また、つくった授業を実践した上で大学院において授業実践の省察をするという過程を経てこそ、授業力が高まります。だから、大学院のカリキュラムには、学校現場と大学院とを行き来しながらの学びが組み込まれています。

教育についての知、人間についての知、さまざまな教科についての知。教育学研究科では、これらを実践という観点から有機的に結びつけることで、ひとりひとりが教師としての力量を高めます。どうぞそのために、本研究科を活用してください。私たち研究科教員も、みなさんとの学び合いを楽しみにしています。

群馬大学大学院教育学研究科長 齋藤 周



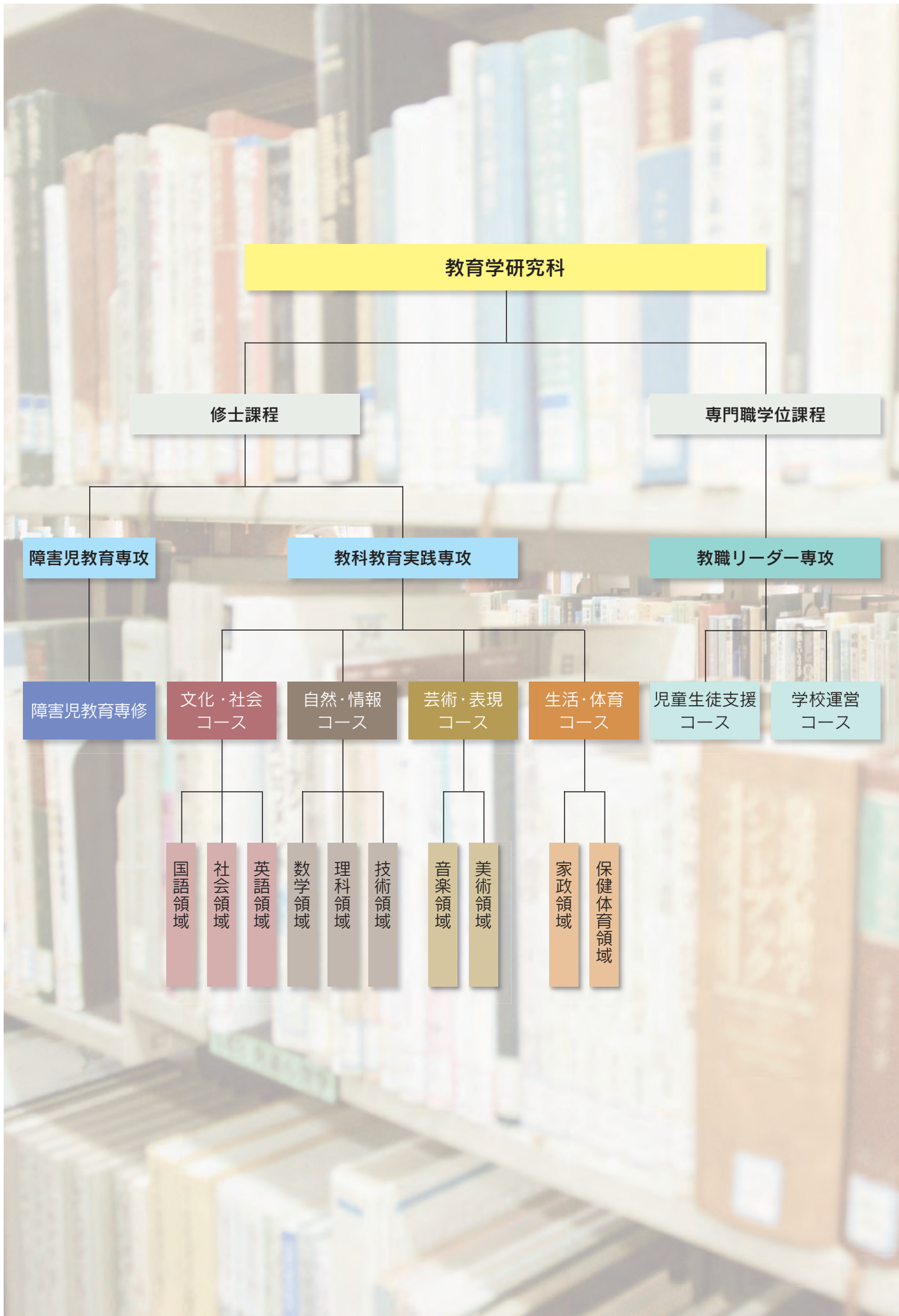


Contents

あいさつ

群馬大学の教育学研究科概略

修士課程の教育ポリシー	4
修士課程の概要	5
障害児教育専攻の概要	8
教科教育実践専攻の概要	10
就職・学生支援・連携	23
専門職学位課程の教育ポリシー	24
専門職学位課程の概要	25
カリキュラムの特色	30
専門職学位課程の2年間	35
就職・連携・学生支援・学生交流	36



教育学研究科

修士課程の教育ポリシー

① Admission Policy 入学者受入方針

～このような人を求めています～

- 1 特別支援教育、教科教育に関する実践的な研究に取り組むために必要な学力を有する人
- 2 教育現場において、指導的な役割を担うための資質・能力・意欲・倫理観を有する人
- 3 教育実践又は教科内容に関する高度な研究に対する情熱を有する人

② Curriculum Policy 教育課程編成・実施の方針

～このような教育を行います～

本課程では、学部教育を基盤とし、教育・研究の成果を社会へ還元するために、次に掲げる教育を行います。

- 1 教育諸科学に関する教育
- 2 特別支援教育、教科教育に関する実践的な教育及び各教科の基盤となる様々な学問に関する教育

③ Diploma Policy 学位授与の方針

～このような人材を育てます～

本課程では、修了要件を満たした次のような者に、修士の学位を授与します。

- 1 優れた教員倫理と豊かな学識を有し、教育諸科学に関する高度な専門的知識・技能及び特別支援教育又は教科教育の実践的指導力を備え、教育現場において指導的な役割を担える者
- 2 学校教育の現代的諸課題に取り組むことのできる研究開発能力及び実践力を備えた者

修士課程の概要

目的

学校には、教師という専門家がいます。教師という専門家の集団が、子どもたちの成長を支える教育という仕事をしています。教師は教育の専門家であり、それぞれの教師には各自が得意とする専門分野があります。様々な得意分野を持つ教師たちが集まり協力し合うことで、学校教育が成り立っています。

ここでは、各分野について高い専門性を身につけている教師を「エキスパート」と呼ぶこととします。「エキスパート」は、学校という教師集団の中で自己の専門性を発揮することによって、その学校の教育力を高めるための重要な役割を果たします。本研究科修士課程が目的とするのは、特別支援教育または特定の教科についての高い専門性をもつ「エキスパート」を育成することです。修士課程で培った研究能力は、修士課程終了後に学校現場において教育実践の水準を高めるための研究を進める上で、大きな力になります。

構成

本研究科修士課程の構成は、以下の通りです。

修士課程	障害児教育専攻 (1学年3名)	文化・社会コース	国語領域、社会領域、英語領域
	教科教育実践専攻 (1学年20名)	自然・情報コース	数学領域、理科領域、技術領域
		芸術・表現コース	音楽領域、美術領域
		生活・体育コース	家政領域、保健体育領域

カリキュラム

1 ▶ 授業構成の概要

障害児教育専攻	特別支援教育に関する科目（基礎領域、実践領域）
	関連領域
	特別研究
教科教育実践専攻	共通基礎科目（教育実践に関する科目、教職に関する科目）
	コース共通科目
	初等教育関連科目
	中等教育関連科目（教科教育に関する科目、教科内容に関する科目、特別研究）
	体験科目

② ▶ カリキュラムの特徴

障害児教育専攻では、各学生は、特別支援教育の理論と実践の両面に渡って学びを深めます。教科教育実践専攻では、各学生は、それぞれの教科の教科教育学と当該教科を構成する種々の学問分野の学びを深めると同時に、その成果を授業実践に結実させる力を養います。また、両専攻の学生とも、特定の校種・教科にとどまらない現在の学校教育の課題を検討する様々な授業を通して、教育現場を広い視野でとらえることを学びます（障害児教育専攻では「関連領域」の授業、教科教育実践専攻では「共通基礎科目」の授業）。さらに、両専攻の学生は、学校現場でのインターンシップを通して、学校・教室での観察に基づいた研究に取り組めます。このような過程を経て、各学生は、高い専門性に支えられた実践的指導力を獲得し、「特別支援教育のエキスパート」ないしは「教科のエキスパート」（「国語のエキスパート」「音楽のエキスパート」などなど）へと成長していきます。

③ ▶ 修士論文と特別研究

各学生は、修士論文作成のために、修士論文指導教員をはじめとする各専攻・各領域の教員の指導のもとで、研究を進めます。また、必要に応じて、群馬大学教育学部附属学校園、学校教育臨床総合センターの協力を得ることもできます。研究テーマは各学生が自ら決定するものであり、一人ひとり異なります。その一人ひとりの研究テーマに即した指導が行われるのが、「特別研究」という授業です。

本研究科における修士論文は、各専修・各領域に関する主題を研究する学術論文であって、研究を進めることが教員としての専門的資質を高め、研究の成果が教育の進展に寄与しうるものであることが求められます。

年度末には修士論文発表会を開催し、専攻・コース・領域を超えて、修士課程での研究成果を共有します。

履修方法・学位・教育職員免許状

① ▶ 履修方法

(1) 履修基準(最低単位数)

本研究科修士課程学生は、障害児教育専攻では30単位以上を、教科教育実践専攻では32単位以上を履修する必要があります。

(2) 修業年限等

標準修業年限は、2年とします。在学期間は、休学期間を除き4年を超えないものとします。

(3) 履修方法の特例(現職教員・福祉施設職員等の学生)

現職教員等は、第1年次は通常の授業時間で履修し、第2年次の履修は、大学院設置基準第14条の規定に基づく教育方法の特例により、在職校等に勤務しながら毎週定期的（例えば平日午後5時以降）に本研究科に登校して授業に出席し研究指導を受け、単位を修得することができます。これは、現職教員等が在職校等の勤務を離れて2年間大学院の授業・研究指導を受けることは困難な場合があることから、現職教員等が大学院で学修する可能性を拡げるために特例を設けたものです。なお、この場合においても、特別研究4単位のうち2単位は第2年次で履修します。

② ▶ 学位

本研究科に2年以上在学し、障害児教育専攻では30単位以上を、教科教育実践専攻では32単位以上を修得し、修士論文を提出してその審査及び最終試験に合格した方に、修士(教育学)の学位を授与します。ただし、優れた研究業績を上げたときと本研究科が認めたときは、1年以上の在学で足りるものとします。

③ ▶ 教育職員免許状の取得

幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭または高等学校教諭の一種免許状を所有する方は、本研究科において所定の単位を修得することにより、それぞれの専修免許状を取得することができます。

専攻	専修・コース	免許状の種類(教科又は特別支援教育領域)
障害児教育	障害児教育専修	特別支援学校教諭専修免許状 (聴覚障害者、知的障害者、肢体不自由者、病弱者)
教科教育実践	文化・社会コース	幼稚園教諭専修免許状 小学校教諭専修免許状 中学校教諭専修免許状 (国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術、家庭、英語) 高等学校教諭専修免許状 (国語、地理歴史、公民、数学、理科、音楽、美術、保健体育、家庭、工業、英語)
	自然・情報コース	
	芸術・表現コース	
	生活・体育コース	

教員免許取得プログラム

本研究科修士課程の学生は、教員免許取得プログラムのもとで、在学中に群馬大学教育学部の授業を履修することにより教員免許状を取得することができます。

取得できる免許状は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校のいずれか1校種に限り、中学校と高等学校については1教科に限ります(中学校と高等学校の同一教科、中学校技術と高等学校工業、中学校社会と高等学校地理歴史・公民の免許状が同時に取得可能な場合には、1教科とみなします)。小学校の免許状は、教科教育実践専攻の学生が取得できます。中学校と高等学校の免許状は、教科教育実践専攻の学生が、自らの所属する領域に対応する教科について取得できます。特別支援学校の免許状は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校のいずれかの免許状を有する障害児教育専攻の学生が取得できます。

本プログラムを受講できるのは、修士課程入学試験の出願時に受講を申請し、修士課程の入学試験に合格し、併せて本プログラムの受講を許可されて入学した学生です。本プログラムの受講生には、修士課程の履修と併行して免許状取得のための単位を履修する強固な意志と計画的な努力が求められます。必要単位数が多い場合は、3年間の在学が必要となることがあります。

障害児教育専攻の概要

教育・研究の概要

障害児教育を専門とする学校において、指導的立場に立つ適切な指導ができる教員を養成します。一方で、通常の学校にも、さまざまな特別なニーズをもつ児童生徒がいます。このため、通常の学校でも障害児教育の専門的な知識・経験に基づいて、一般の教員に対して専門的な助言・支援のできる教員が求められており、特別支援教育コーディネーターの役割やアドバイザー的立場を担える教員を養成します。

障害分野は、知的障害、肢体不自由、病弱、聴覚障害、視覚障害といった特別支援学校免許にある分野はもちろんのこと、重度重複障害や、近年注目が集まっている発達障害など、専門的な教員のもとで幅広い分野について学ぶことができます。

そのために、障害児をはじめとする特別な教育的支援を必要とする児童生徒の、教育原理、教育制度、教育課程、指導法、心理学、医学・福祉などを学ぶとともに、群馬大学附属特別支援学校はもちろん、公立の特別支援学校や福祉施設等の活用や、さまざまなボランティア・サークルなどとともに障害児者に積極的に触れあいながら、より実践的な教育・研究を進めています。教科教育実践専攻と同様、「教職実践インターンシップ」や「教職実践研究」といった障害児の教育や福祉の現場に基づいた単位もあり、こうした現場に立脚した教育・研究が本学障害児教育の特徴と言えます。

さらに、国際的な視野に立つ教員の養成にも積極的に取り組んでおり、留学生の受け入れや、海外研修なども盛んに行っています。

障害児教育専攻では、知的障害、肢体不自由、病弱、聴覚障害の4領域の特別支援学校教諭専修免許状の取得ができます。

また、教員免許取得プログラムでは、教職に強い意欲と関心を持つ方で、幼稚園、小学校、中学校又は高等学校の免許状を有するものに限って、修士課程の履修と併行して学部授業科目の履修を認め、特別支援学校の4領域（知的障害、肢体不自由、病弱、聴覚障害）免許状（一種又は二種）の取得が可能です。

また、障害児教育専攻では、現職教員に加えて、現在福祉施設等に在職している方や過去に在職していた方の大学院受け入れを進めています。受験と修学における特例があります。

教員免許取得プログラムや現職教員等の特例についての詳細は学生募集要項をご覧ください。



障害児教育

修士論文

- 特別支援学校の指導における応用行動分析的アプローチの導入の効果
ー校内研修を通しての取り組みー
- 知的障害者におけるダンス活動参加の支援方法の検討
- 児童生徒の生活機能評価票の探索的研究
ー国際生活機能分類(ICF)の簡約調査票(WHODAS2.0)を参考にー
- 発達障害児における活動内容の目標設定に関する条件の検討
- イギリス特別なニーズ教育におけるPscalsについての考察

専任教員の研究・教育の概要

金澤 貴之

【障害児教育学】

聴覚障害児への手話を用いた指導法や、聴覚障害児者への情報保障に関する社会的な研究を主なテーマとしており、その中で、当事者の主張がどのように取り扱われているのかを切り口に分析をしています。教育においては、聾学校の教壇に立って各教科等の授業ができるよう、手話を含む適切なコミュニケーション方法を身につけ、聴覚障害の認知特性に応じた授業展開や教材提示の工夫等ができる教員を養成することを目指します。

吉野 浩之

【障害児病理学】

障害を持つ子どもの生活の質(QOL)向上のために、医学的・社会的に支援するシステムづくりを目指した研究をしています。小児在宅医療の推進、教育・福祉・医療の多職種による専門職連携、栄養療法、医療的ケアなどを主なテーマにしています。授業では、障害児の生理学・病理学・解剖学などを基礎に、教員にとって必要な医学的な知識や考え方、学校における医療的ケアなどを、教育の目線から学びます。

霜田 浩信

【障害児心理学】

知的障害児および発達障害児における発達支援方法に関する研究を大きなテーマとしています。個人と環境の相互作用として「行動」を捉え、問題の解決を個人のみを求めるのではなく、環境との相互作用の中で改善しようとする視点によって支援方法の検討を行います。また、知的障害児や発達障害児に対する知的機能、認知・行動特性を適切にアセスメントし、支援計画を立案するとともに適切な支援を実施できる教員を養成することを目指します。

任 龍在

【障害児心理学】

教師教育の観点から、肢体不自由児の指導に携わる教師の専門性及び職能成長、肢体不自由児とその家族の障害受容に関する研究を行っています。また、在日外国人、在外日本人、そして開発途上国の子どもへの教育及び支援等についても、特別支援教育をベースとして国際共同研究を推進しています。教育においては、肢体不自由児や重複障害児のニーズを的確に把握することができるよう、実態把握の中でも、特に「行動観察」に関する専門性向上に力を入れるとともに、多文化共生社会を担っていく人材としてグローバルマインドを有する教員の養成を目指しています。

木村 素子

【障害児教育学】

20世紀転換期米国通学制聾学校史の研究を通して、社会は障害者をどのように捉え、どのような目的・方法で障害者を教育しようとしてきたのか、それは私たちの生きる社会にどのような示唆を与えるのかを考えています。授業では、障害児教育の原理、インクルーシブ教育、知的障害児の教育課程と授業作り等のテーマを扱いますが、良質な論文や原典資料等を適切に選び丁寧に検討することができるようになることを重視して指導し、変化のある時代においてもその教育の本質を捉え実践にあたる教育学的視点と学び研究し続けることのできる研究能力をもった特別支援学校教員の養成を目指しています。

中村 保和

【重複障害教育学】

重度・重複障害の子どもとの教育的係わり合いに関する研究に取り組んでいます。特に、視覚や聴覚などの感覚障害に他の障害をあわせ有する重複障害の子どもを中心に、コミュニケーション及びインタラクション、探索行動をテーマとする種々の実践研究(アクション・リサーチ)を行っています。院生となるみなさんには、実際にこうした障害の重い子どもに働きかけ、自身の働きかけを記録して振り返り、そこから新たな働きかけを模索して実行することを循環させる「実践的力量」を高めるための実践場面を提供します。実践を通して子どもの行動の捉え方や授業作りの工夫に関する知識を習得し、特に、重度・重複障害の子どもに働きかけることのできる「実践力のある教師」を目指します。

教科教育実践専攻の概要

教科教育実践専攻は、4コース・10領域で構成されています。各領域は、小学校・中学校・高等学校の教科に対応しています。入学試験のときは、4コースの中のひとつを選び、さらにそのコースの中の1領域を選んで受験します。入学後は、各自の所属する領域に重点を置いて研究を進めます。

共通カリキュラム

教科教育実践専攻には、教科の枠を超えて学生がともに学ぶ授業と教科ごとに学びを深める授業とがあります。後者については各コース・領域のページでご紹介することとして、ここでは前者の共通基礎科目をご紹介します。

■ 教育実践に関する科目

「教職実践インターンシップ」2単位と「教職実践研究」2単位の合わせて4単位で構成されています。インターンシップというと、仕事の見習いを想像されるかもしれませんが、特に、教員養成の一環としてのインターンシップというと、学校現場で先生のお手伝いをするのが思い浮かびそうです。しかし、大学院のインターンシップがそれでは不十分です。このインターンシップでは、学校現場を観察と研究のフィールドと位置づけます。学生は、学校現場をフィールドとする多様な研究課題があることを「教職実践研究」の授業を通して学び、一人ひとりが自らの研究テーマを設定します。その研究テーマを携えて、学生は学校現場に赴きます。主なフィールドは附属小学校と附属中学校です。学生によっては、海外の日本人学校等をフィールドに選ぶこともあります。観察の対象とする授業は、その学生が専門とする教科に限られません。国語を専門とする学生が算数の授業の観察して研究する、理科を専門とする学生が英語の授業を観察して研究する、といったことが珍しくありません。インターンシップ期間中、学生は、観察結果を大学に持ち帰って研究科教員の助言を受け、さらに観察・研究を進めます。大学と学校現場との往還を通して得られた各自の観察・研究の成果は、発表会で共有され、冊子にまとめられます。

《研究科教員が提示する研究課題と方法》

- 教育経営研究の進め方
- 授業研究の進め方
- 特別のニーズのある子どもの支援研究の進め方
- 教育課程経営研究の進め方
- 比較教育研究の進め方
- 教室のジェンダーの研究の進め方
- 小学校英語の教科化と教員の課題
- 個人・集団へのアセスメント研究の進め方
- 情報教育における情報モラル教育の研究の進め方
- 教室談話分析の進め方
- 子どもの体力の現状と評価方法
- 量的研究と質的評価の進め方

《学生が取り組んだ研究の例》

- 授業におけるコミュニケーション連鎖 — 解釈の主観性に着目して—
- 生徒のリヴォイシングに着目した教室談話分析
- 算数数学授業のノートテイクに関する事例研究
- 学び合いの授業における教師の問いの重要性 — 概数の授業から—
- 理科の問題解決型授業における批判的思考の育成
- 「学び方を学ぶ」の視点からみた小学校理科授業
- 小学校外国語活動及び中学校英語の授業における言語活動の充実
- 社会文化的アプローチによる音楽の授業分析
- コミュニケーション時の声の高さと歌唱共通教材の音域
- 色とジェンダー
- 学校体育授業におけるウォーミングアップと教師意識に関する研究
- 小学校・中学校における体育授業内の身体活動量について

■ 教職に関する科目

学校教育に関する多種多様な問題を、様々な教科を専門とする学生が集まって、ともに学びます。こうすることで新たな視点が獲得でき、一人ひとりの研究に深みが出ます。

《開設されている授業》

- 学校の自己更新力と教師
- 教育法規に学ぶ教員の職務と学校経営の課題
- 教育学原論
- 障害児の行動理解と支援
- 学校教育と現代社会
- 授業分析論
- 学校ヘルスプロモーション
- 外国人児童生徒と教育
- 学習指導論
- 生徒指導論



各コースの概要

教科教育実践専攻では、隣接する教科群をひとつのコースとして、関連領域に視野を広げる学びを進めています。以下で、4コース10領域それぞれの概要をご紹介します。

■ 文化・社会コース(国語領域・社会領域・英語領域)

社会を構成する諸個人は、異なる文化的背景をもつ他者とのコミュニケーションを通じて相互理解を深め、人類のこれまでの蓄積の上に未来を築いてゆくという役割を担っています。それゆえ、やがて社会を動かしてゆくこととなる子どもたちも、このような力量を身につけ伸張させてゆくことが必要であり、そのために文化・社会・言語にかかわる教育をはじめ学校教育が果たすべき役割はたいへん大きいものです。

このコースでは、子どもたちが他者を、ひいては人類の営みを理解し、コミュニケーションを通じて社会を形成する能力を獲得するための教育のあり方を、多角的に探求します。そして、このことを通じ、高度な専門性に裏打ちされた実践的指導力を有する教員を養成します。

■ 自然・情報コース(数学領域・理科領域・技術領域)

自然科学上の知見は、その科学技術への応用とも相俟って人間社会の発展を支えてきたのであり、今後の持続可能な発展を構想する上でも不可欠です。学校教育における数学と理科と技術の学びは、この知見を共有し発展させる基盤となっています。

このコースでは、講義・演習・修士論文作成を通して、科学的思考力を高め、自然科学教育・情報教育等に関わる知識と能力の獲得を目指します。さらに高度情報化社会を生きる人間にとって重要な問題解決能力を形成するために、理論と実践を架橋した教育を充実させ、高度専門能力に基づく実践的指導力を有した学校教員を育成します。

■ 芸術・表現コース(音楽領域・美術領域)

音楽と美術は、社会において、感性や身体などの人間性によって表現され、受容される芸術です。これらの芸術は、現代における豊かな創造性や思考力、さらに非言語のコミュニケーションによる共同性と認識力の育成に総合的に関わってきました。

このコースでは、表現のための実践および知識と、芸術文化や芸術教育をめぐる思想・歴史などの理論の双方を複合的に学び、課題を探求します。優れた表現技術と広範な専門的教養の獲得や、高度な教育実践力の育成を通じて、芸術についての教育と研究の指導者的な実践者の養成を目指します。

■ 生活・体育コース(家政領域・保健体育領域)

生活や健康にかかわる諸問題がいつそう複雑化する現代社会で、子どもたちに、生涯にわたる健康の保持増進と生活環境改善の実践力を育てるためには、教師を目指す者自身が多様な生活現象や行動現象とそのメカニズムを探求し、それらを読み解く高いリテラシーを持つことが不可欠です。

このコースでは、現代社会が直面する生活、健康、運動に関する諸問題を科学的に分析し、その解決と支援方策を追究して、健康で真に豊かな生活を創造していくために、自然科学・人文・社会科学をクロスする生活科学と体育科学について研究を深めます。また、研究の知見と成果を生活科学と体育科学の教育に活かし、これらの教科における現代的課題を理論的・実践的に探求しながら、教育計画および教育実践をより豊かに創成し続ける高度な専門性と指導力の育成を目指します。

各領域の概要

文化・社会コース

国語領域

国語学、国文学及び教育科学の諸研究を基礎に据えた国語科教育科学の理論の確立並びに実践の深化を志向する専門的研究を行い、国語教育を総合的に探求します。

学校教育における国語科の任務である日常の言語習得の問題とともに、過去から現在に至る民族の言語文化の諸相を学び、それを国語教育に生かす方法と実践の課題を追求します。

修士論文

- 「伝統的な言語文化」に親しむための和歌学習 – 『万葉集』の物語性を活かした学習の提案 –
- 日本における『書譜』の受容
- 古典和歌への入り口 – 歌ことばの教材の可能性 –

専任教員の研究・教育の概要

濱田 秀行

【国語科教育】

国語科の授業実践について研究しています。特に話し合い活動を通して子どもたちが読みを深めていく過程に関心をもっています。研究協力者をお願いして継続的に授業を観察させてもらい、教室談話を分析するスタイルで研究を進めています。授業では、小中学校国語科の実際の授業事例についての議論を通して、国語科における主体的・協働的な授業のあり方について学びます。

河内 昭浩

【国語科教育】

現在は、国語科教育学の中の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」並びに「書くこと」領域を中心に研究をしています。また別に、宮沢賢治をはじめ児童文学と国語教育との関連にも強い関心を持っています。授業では、研究の基盤となる国語科学習指導の変遷や諸家の理論について学びます。また別に、特に漢字・語彙指導について議論を深め、授業実践も行い、国語科教員としての専門性の向上に努めていきます。

小林 英樹

【国語学】

日本語母語話者は、日本語を使いこなせる日本語の「プロ」です。しかし、その日本語の「プロ」でも、何げなく使っている日本語のしぐみを説明することは難しいです（これは、常に吸って吐いてをしている呼吸の「プロ」である私達が呼吸のしぐみを上手く説明できないのと同じです）。研究は、漢語サ変動詞を手がかりにして、日本語のしぐみを分析しています。授業は、日本語の「プロ」である学生のみなさんと、日本語のしぐみを言語学的に考えていくようにしています。

小林 正行

【国語学】

日本語の歴史の変遷について研究しています。文法史を専門として、口語資料を主な対象に、歴史の変遷を分析しています。授業では、口語が反映されたことばが用いられる伝統芸能や、単語の意味の歴史的な変化、文法の歴史的な変化に触れ、いま私たちが用いる日本語が、どのような変遷を経て今の姿になったのか、について理解を深めていきます。「言語は変化するもの」という観点から、「正しい日本語」という考え方に揺さぶりをかけます。

藤本 宗利

【国文学】

枕草子を中心とする平安文学の研究をしています。枕草子の特異性を、和歌や漢詩文との関わりから表現的に探り、その宮廷文学としての本質を源氏物語や紫式部日記との比較において考察しています。授業では、「古典好き」を育てる古典教育のあり方を追求します。

永由 徳夫

【書写・書道】

日本および中国の書論・書道史を研究対象としています。日本の書は、古来中国書法をどのように受容し、理論づけたのか、日中相互の書藝術観を探究することは、書道史の再構築につながります。授業では、古典籍の精読を通して思想や歴史を学び、文字文化伝承の重要性を理解するよう、心掛けています。教育現場はもとより、所与の場で、手書き文字の持つぬくもりを伝えていける人材を育成していきたいと考えています。

社会 領域

社会科教育の理論を深め、現場での実践にその成果を反映させるため、社会科教育、歴史、地理及び公民の4分野のいずれかを重点的に研究します。また、他分野との有機的な関連の理解と、地域社会の動向に対応することのできる実践的な能力を養成します。

修士論文

- 社会科教育における「生きる力」の一考察 - 「キー・コンピテンシー」を手がかりに -
- 群馬県における農業の特性と担い手層の実態
- 性別による“らしさ”から“自分らしさ”へ - 小学校社会科男女平等教育の授業開発とその実践 -

専任教員の研究・教育の概要

藤森健太郎

【歴史】
日本史

日本古代の儀礼について研究しています。特に、天皇の即位に関する儀礼を中心に調べており、2000年には『古代天皇の即位儀礼』（吉川弘文館）を上梓しました。最近では、古代から中世にかけて、儀礼を含む社会秩序システムがいかに変化したのかに興味を持っています。大学院では、こうした専門をも踏まえつつ、日本史学の基本的な考えかたや研究方法、専門知識の教育現場での活用を考えます。

今井 就穂

【歴史】
東洋史

日中戦争史や中華民国期の経済、日中関係を中心に、中国の近現代史の研究をしています。また、中国の資本家たちの社会的な活動や戦前における日本企業の対中進出についても興味をもっています。好き・嫌いを超えて、中国社会や日中関係、そして東アジア世界を、さまざまな角度からいっしょに考えていきましょう。

松沼 美穂

【歴史】
西洋史

19世紀末から20世紀初めにかけてのフランスとその植民地との関係を、主に国際関係史の視点から研究しています。最近では第一次世界大戦期に特に興味をもち、またこの戦争についてフランス語圏カナダの歴史にも関心を広げています。授業では西ヨーロッパ現代史を主として扱い、一次史料を読むことに努めます。あわせて、歴史教育やコメモレーションなどを通して、現代社会における歴史学の役割についても検討します。

関戸 明子

【地理】
人文地理学

農山村をフィールドとして、伝統的な環境利用、歴史的景観の分析、地域資源の保全・活用、ツーリズムと地域変容などに関心をもち、調査・研究を行っています。授業では、地域分析のための資料の集め方と図表作成の手法を修得するとともに、フィールドワークをとおして、地域の課題や魅力を捉える力を身につけていきます。地理的な見方・考え方、地理的技能を育て、フィールドに出かける楽しさを共有したいと思います。

青山 雅史

【地理】
自然地理学

専門分野は自然地理学で、主に山岳地域の地形や環境変遷に関する研究を行っています。東日本大震災発生以降は、地盤の液状化による被害に関する研究にも取り組んでいます。現地踏査から地理情報システム(GIS)を用いた解析作業まで、さまざまな手法を用いて研究を進めています。授業では、社会科地理分野のなかの自然地理学的テーマを検討対象として、さまざまな地域の生い立ちを自然地理学的観点から検討したいと思います。

斎藤 周

【公民】
法律学

数ある法領域の中でも労働法が中心的研究分野です。国際人権法を踏まえながら、ジェンダーに敏感な視点から男女雇用平等の研究を進めています。現在の主な研究テーマは、ワーク・ライフ・バランスの実現を支える法のあり方です。授業では、小中学校社会科の政治分野の学習の中核となる憲法を、主要な検討対象とします。あわせて、ジェンダーと法、法教育ないし主権者教育についても検討します。

豊泉 周治

【公民】
社会学

若者をめぐる諸問題の分析、諸課題の解決に寄与することをめざして、現代日本社会の社会学的研究を行っています。近著として『若者のための社会学』（はるか書房、2010）、『〈私〉をひらく社会学—若者のための社会学入門』（共著、大月書店、2014）。関連して、デンマーク社会についても研究しています。授業では、複雑な現代社会の諸課題のなかで成長する若者への視点を見失わない社会科のあり方について、考えたいと思います。

小谷 英生

【公民】
倫理学

18世紀ドイツの哲学・社会思想史と現代の正義論、徳倫理学やフェミニズムを通じて市民と公共性について研究しています。「公共性」「公平」「平等」などをキーワードとしつつ、大学院ではジュディス・バトラーやナンシー・フレイザー、ドゥルシラ・コーネルといった現代アメリカのフェミニストの議論を丹念に追いつつ、参加者でディスカッションを行うという形式の授業を行っています。

中尾 敏朗

【社会科教育】
社会科教育学

主な研究領域は、小中学校の歴史学習です。特に、日本の歴史をアジアの動きの中に位置付けて子ども自身に考察させる学習指導の在り方を、彼我の歴史教科書分析を踏まえ、また解釈や対話を重視する欧米流の歴史学習の手法に着目しながら研究を進めています。授業では、歴史を含む社会的事象を児童生徒がより深く理解するための学習指導の姿を、問いの設定やそれに基づく考察・対話の在り方に着目して検討していきます。

宮崎 沙織

【社会科教育】
社会科教育学

小中高の社会科教育及び地理教育のカリキュラム研究を行っています。中でも環境や持続可能性にかかわる問題について興味関心を持ち、アメリカ・カナダなど海外の社会科教育の動向を参考に、これからの社会科教育のあり方について考えています。授業では、“グローバル”な視点を大切に現代社会の諸課題に対して社会科教育はどう対応できるのかを、これまでの社会科教育における議論を参考に検討します。

英語領域

ますます緊密化する国際社会で英語教育の果たすべき任務は極めて重くなっています。本専修では、英語科教育及び英語学・英米文学に係る専門知識を一層深め、英語教育における理論と実践において指導的な役割が発揮できる人材の育成を図ります。

修士論文

- A Study on Processing Load of Different Types of Verbs in Reading
- The Effect of Comprehensible Input in the Team-Taught EFL Classroom
- The Effect of Output Practice on the Enhancement of Productive Vocabulary Acquisition

専任教員の研究・教育の概要

上原 景子

【英語科教育】

言語の理解・生産・習得の理論を柱に、英語教育全般(小中高の授業実践と評価、言語活動、TT、教材開発)、英語教育改革に向けた小中高の円滑な接続、聴覚障害学生の英語学習支援方法の開発について研究しています。また、第二言語習得理論に基づき、心理言語学的観点での実験調査を核とした研究もしています。授業は全て英語で行い、言語の理解・生産・習得のメカニズムに関わる世界の先行研究を学び、実践への応用を考えます。

レイモンド・アゲンボム

【英語科教育】

My research focuses on the development of L2 English fluency in listening, speaking, reading, and writing. This involves creation and promotion of curriculum and activities that increase learners' comfort and automaticity within the entire range of learner proficiency levels. In courses, students present and lead discussions on assigned texts on L2 teaching methodology, including on creation of programs, teaching of 4 skills plus grammar, testing, classroom management, and motivation.

渡部 孝子

【英語科教育】

英語教育について、フィンランド、韓国、英国の外国語教育との比較教育的なアプローチを用いながら、グローバル人材育成を踏まえた英語科カリキュラムの研究を行っています。現在の主な研究テーマは、グローバル人材の育成のための言語教育のあり方です。授業では、政策としてのグローバル人材育成と英語教育の視点から小学校英語教育、ジェンダー、多文化共生などのテーマを主として検討します。

柴田知薫子

【英語学・音韻論】

子どもが言語を獲得する過程には、言語変異(language variation)や言語変化(language change)との並行性が観察されます。耳から入った言語の音声は電気信号に変換されて脳に伝達されますが、蓄積された音声言語が100%の正確さで出力されることはないため、その微妙な差異が言語変異を生み、言語変化へとつながるからです。英語に限らず、自然言語という大きな宇宙を時空を超えて旅することを目標としています。

山田 敏幸

【英語学・統語論】

英語と日本語の非文を主な題材とし、生成文法理論の枠組みで、人間言語を最小の道具立てで原理的に説明できるか理論的・実証的に研究しています。授業では、生成文法理論の基礎概念を理解した上で、技術的詳細を修得できます。修士論文研究では、修得した知識・技能をいかし、主に統語論・意味論の諸問題に対して新たな貢献ができるよう、理論言語学、実験言語学の立場から指導します。最終的に、英語教育のヒントが得られるはずで。

宮本 文

【アメリカ文学】

主に20世紀以降のアメリカ文学を研究しています。授業では、文学作品やその批評の精読を通してアカデミックな思考方法を学んだり、より多様なテキストの読みに触れることによって人間への理解を深めることを目標としています。



金田 仁秀

【イギリス文学】

主に19世紀後半から現代のイギリスにおけるレスビアン・ゲイ・バイセクシュアルに纏わる性の言説を研究しています。授業では、特に19世紀後半のイギリスにおける、これらと関係する文学作品、論考、エッセイ、回想など、多様な文献を取り上げ、ジェンダーとセクシュアリティについて多角的な視点から読み解く能力を養い、現代における性の問題を分析、考察する礎を築きます。

田中 一嘉

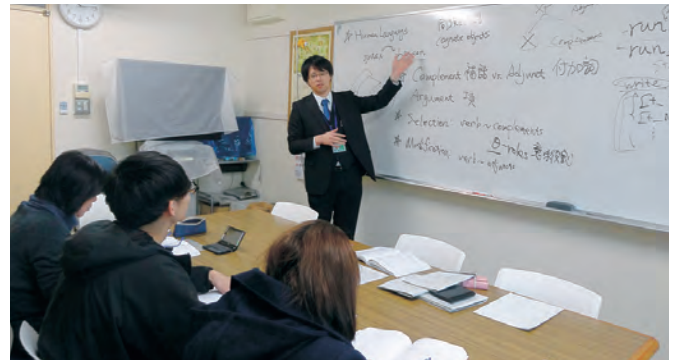
【言語文化・ドイツ語学】

ドイツ語の法助動詞等の語用論的な振舞いと、日本におけるドイツ語の初級教育の在り方を研究しています。授業では、ドイツ語学を通じて、英語学では出会う機会の少ない言語研究のトピックやアプローチを紹介し、日・独・英の各言語を比較対照をしながら、言語研究の様々な側面を学びます。また、義務教育における英語教育と、大学専門外教育におけるドイツ語初級教育の比較対照も行い、日本における初級外国語教育の在り方を問い直します。

三原 智子

【国際文化・フランス文学】

19世紀フランス文学を研究対象とし、現在はその中でも特に、ギュスターブ・フローベールの作品を研究しています。主たる研究テーマは、フローベール作品における時間概念の生成です。授業では、フランスにおいて影響力をもつ批評家の作品(日本語)を読み、異なる視点に立つことを学びます。また、フランスの文学作品(英訳)を読み、そこに描かれる法律・教育制度・宗教などについて、日本のものと比較検討します。



自然・情報コース

数学領域

代数学、幾何学、解析学及び応用数学の教育・研究を深めるとともに、数学教育学に関する理論的・実践的研究を行います。

また、その専門的な研究成果を生かし、教育・研究において中心的・指導的役割を果たすことのできる能力と人材を養成します。

修士論文

- 中学校数学科における数学的な表現力の向上につながる「数学的記述表現活動」についての研究
- 高等学校数学授業における知識の協同構成の研究
- C*-ALGEBRAS OF GRAPHS

専任教員の研究・教育の概要

西谷 泉

【数学科教育】

数学教育学における比較教育学、授業研究論等を専門とし、①現地調査に基づくアジアを中心に欧米も含めた諸外国の数学教育の研究、②明治～昭和期を中心に教科書等に基づく数学教育史の研究、③学校現場をフィールドとする算数・数学の授業改善の意味論・方法論などを研究しています。講義では、国内外の研究論文や文献の輪読・討議を中心に、より深い学識と高い実践的指導力育成を目指し、指導を行っています。

江森 英世

【数学科教育】

専門は数学的コミュニケーション論。数学学習におけるコミュニケーション連鎖の認知的な分析と考察を通して、新しいアイデアが他者との協働的な思考によって創発される認知メカニズムの解明に取り組んでいます。大学院では、「三人寄れば文殊の知恵」はいかにして成立するのかという問題について考察を深めることにより、数学教育におけるアクティブ・ラーニングについて理論的かつ実践的に語る能力を育成します。

大竹公一郎

【代数学】

有限群の圏における剰余所化の研究を行っています。また、確率論的素数判定法に興味を持ち、Solvay-StrassenやMiller-Rabinの素数判定法が確率的数値以上に信頼できる事を明らかにしたいと思っています。授業では素数判定を意識して、整数論における相互法則を扱い、関連してSolovay-Strassenの定理を証明します。最後に整数論の応用としてRSA暗号を扱います。暗号化と復号が行われる原理を説明し、実演も行いたいと思っています。

石井 基裕

【代数学】

アフィン・リー環などの無限次元リー環に付随する量子群の表現論や関連する組合せ論的幾何学的構造を研究しています。大学院の講義では、小中学校の算数・数学の教材開発への応用を念頭に置き、初等的に取り扱うことが出来る様々な組合せ論的構造やそれらの背後にある代数的構造を学びます。

山本 亮介

【幾何学】

低次元トポロジー、中でも3次元多様体の特徴付けに関する研究を行っています。主に有向閉3次元多様体が必ず持つ「オープンブック構造」に注目し、そこから3次元多様体の位相的性質を読み取る方法を探求しています。授業では、小中学校の算数・数学における図形分野、すなわち初等幾何学を現代幾何学の視点から再認識するための考察や議論を行ないます。

伊藤 隆

【解析学及び応用数学
(関数解析学)】

ヒルベルト空間上の作用素環の解析的構造及び代数的構造の研究が中心テーマですが、特に、作用素空間のテンソル積に入るクロスノルム及び双対空間を考察することにより関数解析の量子化の研究を進めています。授業では、小中学校で算数、数学の学習のあらゆる場面で登場する「円周率」を検討対象とします。円周率の解析的側面だけでなく幾何的側面や代数的側面も、歴史的な発展段階を踏まえつつ検討します。

照屋 保

【解析学】

作用素環と呼ばれるヒルベルト空間上の作用素の作る(非可換無限次元)環の研究をしています。特に、作用素環とその部分環の関係を調べる指数理論を中心に研究を行っています。大学院では数学の高度な知識を身につけることによって自分で文献や資料を調べて最新の研究動向について情報を得ることができるようになり、それを数学の教員として学校現場で活用できるようにすることを目標に指導します。



理科 領域

自然科学の各分野(物理・化学・生物・地学)についての教育・研究を深めるとともに、理科教育に関する理論的・実践的研究を行い、両者を有機的に関連させます。教科内容についての堅実な知識と教科教育面での豊富な実践を基に、総合的な理科教育学の確立を課題として追求します。

修士論文

- 複数の要因を含む事象に関する研究
- 中学校理科の授業を活用したくすりに関するカリキュラムの開発とキノリンやインドールなどのヘテロ環化合物の固相合成法の開発
- 中学校理科における軟体動物の体の特徴の理解

専任教員の研究・教育の概要

寺嶋 容明

【理論物理学】

量子物理学を中心に相対性理論、統計力学、情報科学が密接に関連した分野について理論的な研究を行っています。現在の主な研究テーマは量子コンピュータや量子暗号の基礎となる量子情報や量子測定についてです。授業では、小中学校理科における粒子やエネルギーといった考え方をより専門的に理解するため、素粒子論や相対性理論などを扱います。研究指導では、コンピュータを用いた教材開発などを行います。



青木 悠樹

【低温物理・表面科学】

物性物理の実験研究分野です。極限環境下におけるナノ物質の量子効果を実験的に調べる研究を進めております。また並行して学校教育現場におけるICT機器の利用法についての研究を進めております。タブレットをはじめとするICT機器を理科実験のなかでどのように活用していくかを研究しております。授業では、表面科学、低温物理の基礎的理解、またICT機器を用いた理科実験の授業開発について学びます。

日置 英彰

【有機化学】

多種類の化合物を一挙に合成し、その機能を評価するコンビナトリアル化学の手法を用いて、医薬品や機能性材料の候補化合物の探索を行っています。研究室に配属の大学院生は上記手法を用いた有機合成化学の研究に加えて、理科の授業を活用したくすり教育に関する教材やカリキュラムの開発も行っています。授業では化学だけでなく、ネットワーク配信教材の理科授業における活用法についても検討しています。

岸岡 真也

【無機・分析化学】

電気分解や酸化還元反応、エネルギー変換などを扱う電気化学を研究分野としています。現在の主な研究テーマは走査プローブ顕微鏡を用いた分子機能電極の基礎と応用であり、エネルギー変換を実感できるような教材の開発についても興味を持っています。

佐野 史

【植物生理学】

植物が生きるために駆使している可塑性の実体を明らかにし、さらに学校教材として活用することを目的として研究しており、修士の学生にも同様のテーマを担当してもらいます。教材用モデル植物のファストプランツやオオカナダモ、植物培養細胞などを材料に、顕微鏡観察を中心とした細胞生物学的な解析を主に行っています。授業では生物学のトピックスや最近の実験手法を取り上げ、学校の教科書よりも“奥”の理解を目指しています。

佐藤 綾

【動物学】

生態学、進化学が専門です。特に小型魚類を対象に、動物の行動や形態の進化的背景を解明していきます。また、動物を対象とした実験教材の開発を行っています。授業では小・中・高等学校理科における生物の内容を踏まえ、実験・観察や議論を通じ、進展し続ける生命科学の分野において、何をどのように学び、教えていくのかを考えていきます。修士論文は専門研究を踏まえ、理科教材の検討・開発・実践を行い、まとめていきます。

早川由紀夫

【地質学】

おもに火山とその防災を研究しています。理学だけにとどまることをよしとせず、工学・文学・法律・行政など多角的な視点から研究対象に検討を加えています。大学院の授業では、小中学校で教えるべき地学の内容と方法を取り扱っています。学習指導要領を尊重しつつも、それに縛られることなく学校地学のあるべき姿を自由に考えます。

岩崎 博之

【気象学】

雷や豪雨などの激しい大気現象を研究テーマにしています。雷に関しては、これまで研究されていないヒマラヤ山脈やシベリアなどの雷から、身近な関東地方の雷まで、電波観測に基づくデータを利用して幅広く研究対象にしています。大学院の授業では、小中学校の理科で扱われる大気現象について、実際に受講生が観測・観察したデータや気象庁データなどを利用し、現象とメカニズムの理解を目指します。

益田 裕充

【理科教育学】

理科授業の指導過程であるデザインベース研究と教師および学習者のコンピテンシー形成を関連させた研究を行っています。多様化する学習科学の成果から理科授業を質的に分析し、そのデザインを実証する研究に取り組んでいます。授業では、諸外国との比較教育の観点から日本の理科のカリキュラムデザイン等の特徴を明らかにすることに取り組んでいます。また、今日的な学校経営の課題を教育法規から明らかにする授業も展開しております。

栗原 淳一

【理科教育学】

理科の授業を研究対象とし、科学的リテラシーを育成する指導方法(教材や評価方法を含む)を開発しその効果を検証したり、授業中の子どもの学びを分析して授業デザインの視点を導出したりする研究を進めています。修士課程の授業では、授業分析研究の方法や子どもの科学的な概念の発達を概観し、科学的な見方や考え方を効果的に育成するための指導方法について検討します。

小野 智信

【科学教育実践】

研究としては、小・中・高校での連続性を重視した理科指導法の構築と、その実現に向けた教員研修の在り方について進めています。また、高等学校における学習者主体の学習手法の研究も行っています。教育活動としては、初等・中等・高等教育で行われる理科の履修内容を、日常で見聞きする科学分野へとつなげる活動を通じ、教科指導の質向上を実現するための授業を進めています。

技術領域

科学技術の進歩・発展、技術の教育史に基づいて、技術教育の理念を追及し、技術の教授方法、教材開発を実践的に研究します。技術教育、機械、電気、情報、加工及び栽培の各専門領域の研究を通して、教育学、教育心理学、技術学・工学の理論的及び実践的能力を養成します。

修士論文

- 「エネルギー変換」と「プログラムによる計測・制御」を融合した学習指導法に関する実践研究
- 省エネルギーに関する研究 - ミスト冷却の数値解析 -
- 科学技術と生活との関連に着目した技術教育に関する基礎的研究

専任教員の研究・教育の概要

田辺 秀明

【機械】

技術を構成する諸分野の一つである機械に関する研究を行っています。環境に優しい省エネルギーの機械の実現に必要な基礎的なことについて、実験やコンピューターシミュレーションによって解明を行っています。

本村 猛能

【技術科教育】

技術教育と情報教育の関係及び小中高校の体系化の方向性、教材の在り方について、諸外国の教育と比較検討しながら研究を進めています。現在の主な研究テーマは、我が国の技術・情報教育の固有の目標の提案とカリキュラムの作成です。授業では、技術教育の意義と共に小学校そして高校に繋がるような中学校技術教育の指導方法と、そのための有効な教材作成を主な検討対象とします。

古田 貴久

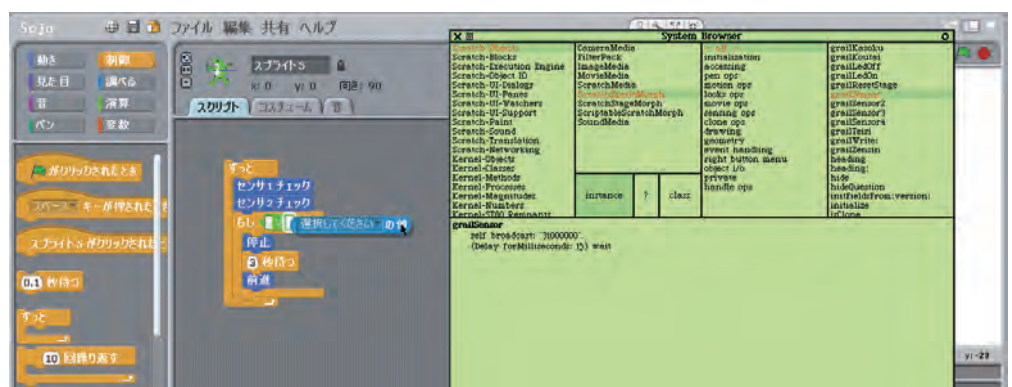
【情報】

大学院の授業では、コンピュータなどの情報機器を応用した教材や授業の開発や、統計解析に関する講義と演習を扱っています。研究では、中学校の先生と共同で、本研究室で開発した技術の「計測と制御」単元の教材・教具を、生徒がプログラムを書いて自動制御する、というカリキュラムの実践を通じて、生徒の技能や意欲の評価や、情報に対する意識の影響を調べています。

片柳 雄大

【電気・技術科教育】

電気に関することを幅広く研究していますが、電気化学的な視点からの燃料電池研究が専門です。また、電気化学センサーなどの研究も行っています。現在は、中学校技術科におけるエネルギー変換教材の研究・開発に力を入れています。授業では、電気エネルギーと他のエネルギーとの相互変換についてや、電気・電子応用機器のしくみ、情報通信媒体としての電気など、電気と技術に関する内容を幅広く扱います。



芸術・表現コース

音楽領域

声楽、器楽、作曲及び音楽学の各分野にわたる専門研究を基盤とし、音楽教育の理論と実践の深化を志向する研究・教育を行い、音楽教育を総合的に追求します。

また、国際化時代に対応すべく、西洋音楽のみならず日本音楽、民族音楽をも含めたグローバルな視野をもつ音楽科教員としての能力を養成します。

修士論文

- 台湾における音楽教育と統合学習領域「芸術と人文」について
－台湾の小学校における実践事例と我が国の音楽科教育への示唆－
- 小編成の吹奏楽における効果的な編曲の研究
- 初期のスクリーパービン

専任教員の研究・教育の概要

吉田 秀文

【音楽科教育】

音楽教育の諸課題を周辺学問領域である心理学や社会学を中心に研究しています。現在は、子どもの学習意欲向上や生涯発達の視点から音楽学習を再検討することを主眼に追究しています。授業では、音楽教育学の理論を文献講読を通して学習したり、学校教育現場における課題を見つけ、それを様々な先行研究をもとに調査を行い、議論します。また、修士論文の作成に向けて、学校教育現場に実際に赴いて実践を行い、理論の検証と展望を行います。

中里 南子

【音楽科教育】

音楽科教育日本音楽における装飾的旋律の機能に着目し、日本古来の装飾的旋律が後世の音楽とリわけ民謡、演歌、現代の若者の歌の中でどのように文化変容を起こし、受け継がれているかを研究しています。授業では、音楽教育学に関する文献講読を通して議論したり、現代の音楽教育における日本音楽の様式理解や、旋律の捉え方、更には日本音楽の指導の在り方を考えていきます。

山崎 法子

【声楽】

声楽専門はドイツ歌曲で、フーゴー・ヴォルフの歌曲作品を中心に研究しています。特に、詩と音楽の関わりについて分析的に研究し、作品理解を深めることで演奏法の可能性を見出します。授業ではこの研究方法をもとに、演奏を通して諸外国の作品の理解に踏み込みます。作曲家の意図を楽譜から読みとり、それを体現していくことは、演奏技術を高めるだけでなく、教材研究を深耕するための手立てとなると考えています。

三國 正樹

【器楽】
ピアノ

器楽におけるピアノ演奏法が研究分野です。特に古典派の演奏法はあらゆるピアノ作品演奏の基本となることから、ベートーヴェンのピアノ作品をどのように演奏するかを課題としています。演奏会のプログラムのあり方も重要な研究テーマで、「連続プログラム」などを実践してきました。授業では現代の器楽演奏分野におけるさまざまな問題を検討しています。

菅生 千穂

【器楽】
管楽器

古典派から近現代の主要なクラリネット作品を中心に、楽器や様式の歴史の変遷、現代の演奏の在り方について、演奏を通して研究しています。室内楽、吹奏楽、管弦楽、同属アンサンブル等異なる演奏形態におけるクラリネットの役割や可能性についても探求しています。授業ではクラリネットに限らず、学校音楽の場で必要となる管楽器や箏など和楽器の、教材・教具としての可能性を実践的に学び、教員としての資質向上をめざします。

西田 直嗣

【作曲】

作曲研究する分野は作曲と音楽理論に大別されます。作曲については、音楽教育における創作指導の原点が自ら創作を行う事であることを踏まえて、創造する事の意味を考察しながら自らの音楽世界の構築に取り組みます。音楽理論については、社会における音楽芸術の必要性について考察しながら、和声、対位法など音楽理論の学習、様々な時代の楽曲研究・授業研究を行い、鑑賞教育の可能性の探求、および音楽教育における音楽理論学習についての研究に繋げてゆきます。

川上 晃

【音楽学】

音楽学主要な研究領域は、日本歌曲です。日本歌曲の中の詩のことばと旋律・リズム・和声の関係、とくに、詩のリズムと歌のリズムの関係を中心に研究を行っています。大学院の授業では、小中学校教材を対象に、教材の旋律・リズム・和声、音とことばの関係、また教材の歴史的背景などについて研究を行い、音楽学の立場から教材研究を深めていきます。

美術領域

美術科教育及び美術の各分野（絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術史及び美術理論）についての専門的研究を深めるとともに、理論的、実践的な研究を行います。また、それによって修得した知識と技能を美術教育に生かし、指導的な役割を果たすことのできる能力を養成します。

修士論文

- 彫刻と人形の間 ―日本美術における人形の立体造形表現に関する研究―
- 中学校美術科教育に於けるアートプロジェクト型学習に関する一考察
- 乳幼児期の子どものアート教育について ―子どものアートの共感者としてのアーティストを中心に―

専任教員の研究・教育の概要

喜多村徹雄

【絵画】

安定／不安定などの観点から、絵画的表現に根を持ちつつ立体を混在させた仮設的状况を創り出すインスタレーション表現の実践的研究・検証をしています。また特定の状況や地位資源を活用したプロジェクト活動も行っています。授業では、20世紀以降の絵画表現の歴史の変遷を概観すると共に同時代の表現の多様性について知見を深め、表現することの社会的価値や学校教育における美術教育の意義および可能性について検討します。

林 耕史

【彫刻】

彫刻のもつ立体造形としての意味と可能性を、実制作を通して検証、研究しています。主に木を材料とした彫刻制作を行い、空間及び社会への作用を考察するインスタレーションも試行しています。授業では、彫刻の歴史の変遷を作品鑑賞や文献調査により概観するとともに、材料・技法に関して研究します。その上で造形美術教育の観点で彫刻を位置づけ、それを通して図画工作科・美術科の教育の在り方を検討します。

齋江 貴志

【デザイン】

プロダクトデザインの立場から、デザインにおける基礎造形の研究を主に行ってきました。また近年は、造形だけでなく、中山間地域の地域振興をデザインの視点から実践的な活動のもと研究しています。授業では、今後のデザイン分野の教育を深く考えていくために必要な、近代からの流れを知ること、また、デザインを創造のための思考方法として捉え、教科や題材のあり方について考えてもらいます。

春原 史寛

【美術史・美術理論】

日本近現代美術史について、作家・作品研究のほか、その受容の諸側面について主に研究しています。特に戦後日本において「美術」や「芸術」に社会が期待した役割や、人々が抱いた「芸術家」のイメージの実相を明らかにしたいと考えています。それら成果をもとに現在の鑑賞教育の充実の方法を検討し、学校教育における博物館・美術館、地域文化資源の活用について研究・教育を行っています。

茂木 一司

【美術教育】

身体・メディア+アートの観点から協同的な学びとしてのワークショップに関する理論・実践の研究を進めています。特に障害児者、エスニック、高齢者、経済的などのマイノリティに対するアート学習／支援をインクルーシブな社会構築のために活用する実践研究を進めています。授業では、基礎的な文献の講読の他、大学外(美術館等)でのアートプロジェクトを活用するなど、地域社会との接触を持った実践的内容にしています。研究指導では、個別のニーズに沿ったアクティブラーニングを基本にしています。

郡司 明子

【美術教育】

美術教育における身体性のあり方に着目し、からだ・気づき・対話を重視した教育活動を「アート教育」と捉え、実践化に向けて研究を進めています。これまで身体性の基礎研究をはじめ、衣食住に基づくアート教育の具体的な題材等を提案してきました。からだをほぐし、協働して学ぶやわらかい空間づくりを目指し、幼小の現場等で実践研究を行っています。大学院では、実践を支える理論として、レτζョ・エミリア市におけるアート教育に関する書籍やデューイの『経験としての芸術』等の輪読を行っています。



生活・体育コース

家政 領域

科学技術の進展とともに変化する生活の諸問題を、食物学、被服学、住居学、保育学及び家庭経営学の立場から分析し研究します。特に、人間と環境の相互関係を各領域を超えた総合的視点でとらえていきます。また、家族や家庭生活の在り方が問い直されている現在、家庭、学校及び社会における生活文化の方向を探る中で、学校における生活教育の展開の課題を追求します。

修士論文

- 家庭科における自己理解に関する学習プログラムの構想
- 地域社会と親の養育態度が小学生の社会的スキルに与える影響
- タイにおける分譲住宅団地の共用空間に関する研究

専任教員の研究・教育の概要

上里 京子

【家庭科教育学】

家庭科教育学を専門とし、日本と外国の家政・生活教育思想史や、カリキュラム比較と開発研究を行っています。最近では特に、科学的系統性重視のカリキュラムを特徴とするフランスの生活科学教育との比較を通して、日本の家庭科教育の認識論やカリキュラム開発を進めています。大学院での学びにおいても、日・仏・米の家庭科教育の現状と課題をリアルに分析し、課題解決の方策についてカリキュラムと授業開発を通して検討しています。

小林 陽子

【家庭科教育学】

家庭科教育学や家政学の成立、変遷に関する史的研究を行ってきました。家庭科教育はジェンダー・サブジェクトとしての歴史をもつため、ジェンダーについても関心があります。近年は、家庭科教育実践や家庭科教員養成にも関心を寄せています。授業では、戦後家庭科のあゆみを「女子用教科」から「男女共修」へ、そして、現在の課題である「男女共教」について、カリキュラムとともに検討します。

西園 大実

【食物学】

食物の生産・流通とその環境負荷が中心的研究分野です。主な研究テーマは、食品のコールドチェーン(低温流通)の冷媒管理のあり方についてです。授業では小中学校家庭科の食物分野と消費・環境分野の学習に視点を合わせ、海外を含む遠隔地で生産された食物の利用が増大する現代における、食教育全般に視野を広げて検討します。

田中 麻里

【住居学】

私たちが生活している空間を対象とした研究とデザインワークを行っています。アジアをフィールドとした伝統的住空間の変容や防災教育について研究を進めています。授業では、小中学校家庭科の住居分野で重要となる住まいの地域性や室内環境の快適性、減災の知恵について学びを深め、地域の特性を理解するための学びのあり方についても検討します。

前田垂紀子

【被服学】

人体-衣服-環境をひとつの系として捉える衣環境学、被服衛生学の研究を行ってきました。被服には身体を保護する役割と機能があります。一方で文化や慣習の下では、着心地や快適性よりも、心理的側面が優先されることもあります。両者の関係性を多面的に追及します。授業では衣服が繊維から作られ、購入、管理、消費のサイクルを通じて、環境まで考えることができる、包括的な衣生活の力を身につけることを目標としています。

保健体育 領域

保健体育科教育、体育学、運動学、学校保健学及び教育科学の理論的及び実践的研究を基礎として、保健体育教育に関する総合的な教育・研究を行います。また、保健体育学に地域性を持たせるとともに、生涯教育を行うことができるように、地域での理論的・実践的な共同研究を進展させ、より学際的・総合的な課題を追求します。

修士論文

- ジュニア・アルペンスキー選手におけるターン動作時の姿勢分析
- 体育授業プログラムが若手教師の教授技術向上に及ぼす影響
－特に、よい体育授業を実践するための基礎的条件に着目して－
- 幼稚園児の運動発達を促す遊びと教師の役割

専任教員の研究・教育の概要

小川 正行

【学校保健】

学校保健領域の中でも健康教育・ヘルスプロモーション・保健統計に関する分野の教育や研究を主に行っています。特に近年の第二次健康日本21政策の中心課題である「健康寿命の延伸」に関係する研究・教育活動では、自立社会生活を可能にするための青少年期からの健康造りと体力作りに着目したデータ収集とその検討を行い学会での研究報告や、大学のみでなく社会教育活動も実践しています。授業では、生涯の健康づくりの観点から学校保健分野での取り組みについて、共同研究形式の授業展開をしたいと考えています。

福地 豊樹

【体育学】

体育学領域、特に体育原理およびスポーツ史（体育史）の内容を取り扱っています。歴史的な研究方法より、スポーツ文化の現在の問題性やこれからの課題について探求しています。スポーツ文化は政治・経済の状況が色濃く反映されています。そうした事柄との関係性を考えねば、これからの学校や社会の中で、しっかりと根づくことは出来ません。授業では教育との関わり、特に「身体性」の課題についてもしっかりと考えてゆきたいと思います。

上條 隆

【運動学】

スポーツ生理・医学の観点から運動に必要な身体機能および過使用による身体変化などについて検討し、競技力向上を目的としたトレーニング方法・障害の予防方法や復帰方法について研究しています。授業においては、教育現場において発生する様々な課題に対して、最新の研究内容を踏まえてディスカッション形式で考えていきたいと考えています。

新井 淑弘

【学校保健】

保健科教育における、“公害問題の教材化と学習効率”に関して、環境科学的視点を重視した研究を行っています。また、健康や運動、環境、老化について、細胞生物学的、生化学的手法を用いた研究を行っています。担当授業は「保健体育科内容研究Y」「保健体育科教育研究C」「学校ヘルスプロモーション」で、その中では“保健領域の授業づくり”についておよび、“学校における新しい健康づくりの在り方”等について考えていきます。

木山 慶子

【体育科教育学】

体育の目標・内容・評価について、学習指導要領の歴史的変遷を踏まえ、検討しています。授業では、体育科教育学の視点から、体育の授業づくりを考えます。よりよい授業への授業改善のプロセスを理解し、特に授業評価についての基礎的基本的な知識・技能を習得し、それらを活用できる実践力を身につけることをめざします。

西田 順一

【体育学】

“体育・スポーツ心理学”を研究分野としています。体育・スポーツに関わる事象や問題を心理学の立場から研究を進め、実践や指導に必要な科学的知見を与えています。近年の主な研究テーマは、身体活動のメンタルヘルス効果、体育授業に伴う心理的恩恵、体罰撲滅に向けた心理教育です。授業では、心理学的理論に則った中学校体育科の指導法を中心として、さらに、小学児童の心理的発達や特徴を踏まえた体育指導法も検討しています。

中雄 勇人

【運動学】

運動生理学およびバイオメカニクスの観点から、運動による身体諸機能および身体動作の変化などを検討し、子どもから高齢者までの体力諸能などの基準値作成や、新たな指導法の構築などの研究を行っています。授業では、運動学等の研究手法を例に挙げて、教育現場において日々新たに発生する課題の発見やその解決方法を学習し、就職した後も現場において自ら課題を克服していける能力を身につけることができるよう検討しています。

鬼澤 陽子

【体育科教育学】

「体育の授業研究(体育科教育の実践的研究)」が中心的な研究分野です。現在の主な研究テーマは、「学習成果を保証するための教材開発とその学習成果を評価するための尺度開発」、「運動が苦手、嫌いな傾向の児童生徒の運動有能感を高める指導の在り方」です。授業では、国内外の研究の動向を踏まえながら、体育の学習指導論、体育の指導方略・指導技術を中心に取り上げるとともに、これからの体育の授業について検討します。

就職・学生支援・連携

就職

過去5年間（2010～2014年度）の修士課程修了者127人中、現職教員が14人、それ以外が113人です。現職教員と進学者2人を除く111人のうち91人（82.0%）が、修了時に教職に就いています（臨時教員を含む）。

学生支援

教職に就くことをめざす学生を対象として、教員採用試験対策講座（自己PR作成指導、面接指導を含む）などの手厚い支援を実施しています。また、学生生活全般にかかわっては、学生相談室において、困っていること、悩んでいること、身体等の調子が悪いことなど、何でも相談に応じています。

連携

修士課程の「インターンシップ」は、群馬大学教育学部附属学校園等との連携のもと、複数の校種の学校現場で実施しています。また、群馬県総合教育センターおよび前橋市総合教育プラザとの連携のもと、両機関で研修中の学校教員の方々が、各自の研究を進めるために修士課程の授業を聴講されます。これによって、修士課程学生が現職教員とともに学ぶ機会が拡大しています。

教育学研究科

専門職学位課程の教育ポリシー

① Admission Policy 入学者受入方針

～このような人を求めています～

【現職教員】

教員としての使命を明確に持っており、数年以上の教職経験を有しているとともに、1あるいは2に該当する人

- 1 授業実践や生徒指導に意欲的に取り組んでおり、勤務校において近々リーダー的な役割を担うことが期待されている人
- 2 勤務校においてリーダー的な役割を一部担っており、将来主任層、指導主事、管理職等として力を発揮することが期待されている人

【学部新卒者】

次の二つの条件を備えた人

- 1 人間性が豊かで、教員志望が明確である人
- 2 教職に求められる専門的な知識・技術の基礎・基本を修得している人

② Curriculum Policy 教育課程編成・実施の方針

～このような教育を行います～

本課程では、以下のようなカリキュラムで教育を行います。

- 1 すべての教員にとって必要とされる諸領域をカバーする「共通科目」5領域（教育課程の編成及び実施、教科等の実践的な指導方法、教育指導及び教育相談、学級経営及び学校経営、学校教育と教員の在り方）
- 2 「共通科目」の中に本課程で独自に設置する「多文化共生教育」領域
- 3 入学したコースに応じ、より専門的に学ぶ「コース別科目」
- 4 学校現場の課題を研究し、自らの実践を通じて課題を解決し、報告書にまとめる「課題研究」
- 5 多様な校種の教育の実践を学び、教員としての力量を向上させるとともに、課題研究と密接に関連した実践とその検証・省察を行う「実習科目」

さらに、こうしたカリキュラムをより効果的にするため、ほぼすべての授業科目、2年間にわたる課題研究の指導、2年次に実施する実習の指導を、研究者教員と実務家教員とのチーム・ティーチングで実施します。

③ Diploma Policy 学位授与の方針

～このような人材を育てます～

本課程では、確かな指導力と優れた実践力・応用力を備えた中堅教員、確かな指導力を備えた有力な新人教員を育てます。さらに現職教員・学部新卒者ともに、修了要件を満たした以下のような能力を身につけた者に教職修士の学位を授与します。

- 1 学校現場の置かれている状況や児童・生徒の現状などを的確に分析・把握し、課題を明らかにする能力を身につけた者
- 2 明らかになった課題に対し、対応策を構築する能力を身につけた者
- 3 構築した対応策を他者（同僚、保護者等）との協働の中で実践し、その実践を評価・再考察する能力を身につけた者

専門職学位課程の概要

理念・背景

現在、学校教育は様々な課題を抱えており、しかも、学校教育にかかわる問題は、複雑・多様化しています。そして、このような複雑・多様化の傾向は、今後も社会構造の変化とともに強まっていくと考えられ、学校教育の混乱がますます予想されます。こうした現状を打破するためには、学校教育の抱える諸問題に対応できる力量を持った教員の養成が急務です。

学校教育に関わる諸課題の解決には、単なる実践の積み重ねによる経験的な実践知だけでは十分な対応が難しく、これからの教員には、学校現場のおかれている状況や児童・生徒の現状などを的確に分析・把握し、その理解のもとに対応策を構築し、他者との協働のもと実践し、評価・再考察できる資質能力が必要であると考えられます。

以上により、群馬大学大学院教育学研究科に、社会のニーズに応える高度専門職業人の養成に特化し、学校教育現場の諸課題を解決できる高度な専門性と実践的指導力を備えた教員養成を目的として、教職大学院（専門職学位課程、教職リーダー専攻）を設置しました。

「理論と実践とを往還するカリキュラム編成」、「多くの実務家教員（学校現場、教育行政等で豊富な経験を有する教員）のスタッフとしての参加」、「豊富な実習」などが、教職大学院の特徴です。

目的

「アクティブ・ラーニング」の提唱、子どもたちが身につけるべき能力・資質の高度化といった学習指導にかかわる諸課題、いじめ、不登校への対応や人間関係の育成といった生徒指導上の諸課題、「教科化」など道徳教育の改革、キャリア教育の推進、「チーム学校」の提唱といった学校教育全般にかかわる諸課題など、現代の学校教育をめぐる課題はますます複雑化・高度化しています。

こうした事態に対処できる教員の育成を目指し、本専攻では、以下の2つの目的を掲げています。

- ① 確かな指導力と優れた実践力・応用力を備えたスクール・リーダーの養成
- ② 新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員の養成

本専攻の入学者は現職教員、学部新卒者等（現職教員以外）に区分され、①が現職教員に、②が学部新卒者等に対応します。

コース紹介

専門職学位課程、教職リーダー専攻では、2つのコースが設けられています。学生定員は、2コースあわせて16名です。

専門職学位
課程

教職リーダー専攻
(16名)

児童生徒支援コース

学校運営コース

児童生徒支援コース

「児童生徒支援コース」は、小・中学校において学習面と生活面を切り離して考えることが難しいゆえ、両側面を併せ児童生徒への直接的支援に関する高度な実践的指導力の育成を目指しています。具体的には、①個々の児童生徒の発達特性・学習能力・学習意欲等に応じた学習支援や生活支援及び学級経営を実践できる力、②通常学級に在籍する外国籍の児童生徒や軽度の発達障害を持つ児童生徒を含めて、学習支援・生活支援及び学級経営を実践できる力、このような資質を身に付けて多様な児童生徒に対して適切な学習支援や生活支援に取り組める教員を養成することを目的としています。

本コースの目的は、現代の学校教育において課題となっている学力低下やいじめや不登校などの児童・生徒の学習や生活面での直接的支援に関しての高度な実践力を身に付けることです。本コースでは、経験的な実践知に加え、児童・生徒の学習や生活面に関して、心理学の諸理論及び関連分野の知見からの科学的、分析的な深い理解に基づいて、指導方法を立案し、実践できる教員の養成を目指します。なお、現職教員以外の方は、本コースに限定します。本コースでは、現職教員学生については、学校や地域で直接、児童生徒に関わる学習指導や生活指導面でのリーダーとなる教員を養成します。現職教員以外の方については、確かな実践的指導力を備えた新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員を養成します。

先輩からの
メッセージ



平成26年度入学

石田 睦

(前橋市立天川小学校：
児童生徒支援コース)

教職大学院進学の道を選択するにあたり、十人十色の背景があると思われます。私は、教職18年目に小・中学校の勤務が同年数になるのを機に、教職経験をふり返りました。また、6年担任が決まった時、児童を送り出すと共に自らも学校現場を離れて学ぶ機会に恵まれたらという漠然とした願望を描いていました。不思議なもので、未来予想図を構想すると物事のとらえ方が変わり、学びたい意欲が未来を引き寄せ、春には群大の桜を眺めておりました。

講義や実習を通して、様々な年齢・経験の仲間と共に学んだ1年次。院生室には小規模校の職員室のような雰囲気があり、時に授業づくりのために議論し、時に各校の現場事情に共感や発見があり、ストマスからは瑞々しい感覚にふれる機会をもらう居心地の良い空間でした。入学前には特定の専門性を究める教科修士課程等も考えましたが、学校現場における諸問題を多面的にとらえて理論と実践を結

びつける教育学を学べる教職大学院は大変魅力的でした。児童生徒支援コースでは、エキスパートによる研究に基づいた学習支援・児童理解について学ぶことができ、実践を見直すきっかけをいただきました。かつての経験から対処してきた実践から、学んだことを試行する実践へと向かう2年次。想像以上に多忙を極めました。それと引き替えに得たものは大きく充実していました。

1年次に育んだ絆で仲間とつながり、励まし合いながら日々修行。同期生がたんぼの綿毛のように散り、それぞれの地で根を張り、実践を通して花を咲かせ、子ども達のために実を結ぶ。私の実践は特段変わり映えなく立派なものではありませんが、支援コースで学べたことによる基本姿勢が「指導」から「支援」への意識にシフトしたことは大きな変化がもたれませんでした。

先輩からの
メッセージ



平成27年度入学

山口 友梨

(ストレートマスター：
児童生徒支援コース)

私は他県の大学に進学していたため、群馬の学校現場についてよく知らないまま教員になることを不安に思っていました。また自分の専門教科だけでなく、他の教科の指導法についての知識を深めたいとも考えていました。そこで、群馬県内の学校で実習を通じた実践研究ができ、教育に関して幅広く学ぶことができる教職大学院に進学することを決意しました。

私たち8期生は、学部新卒者4名・現職教員13名という構成です。入学する前は、現職の先生方と共に学んでいくことに対して緊張していました。しかし講義が始まってみると、現職の先生と協力して取り組む課題も多く、すぐに打ち解けることが出来ました。先生方から経験や知識、様々な事例を教えてもらえるのは、現場を経験していない私にとって大きな学びとなっています。

私が在籍している「児童生徒支援コース」では、教育心理や教育相談、発達障害を持つ子どもへの対応

など、学校現場ですぐに生かせるような児童・生徒理解や支援を中心に学習しています。この1年を通して印象に残っているのは、学習支援や教育評価の講義で、グループごとに授業を計画し、代表で模擬授業を行ったことです。同じグループの先生と協力して指導案から授業を作成し、模擬授業の練習から発表に至るまで、授業のことを基礎から丁寧に教えてもらえました。模擬授業発表後には、さらに良い授業にするために大学の教授も交えて、現職の先生全員と授業検討会を行いました。指導案作成段階から現職の先生と授業づくりができたのは、とても貴重な経験となりました。

教職大学院では、様々な角度から教育について考えを深めることができます。1年次では7週間、2年次では30日以上教育実習が設定されており、学校現場での経験も多く得られます。大学院の講義で得た知識と、子どもとの関わりの中での学びは、教員としての一歩を踏み出す自信となるはずで





■学校運営コース

「学校運営コース」は現職教員のみを対象とし、①学習指導要領を踏まえ、学校の実情に合った適切な教育課程を編成できる力、②リーダーとなって、研修会等を計画・立案・実行できる力、③地域の教育力を活用しつつ学校運営に貢献できる力、④外国籍の児童生徒や障害のある児童生徒にも適切な指導が行われるよう教員をリードできる力など、学校運営のリーダーに求められる様々な資質を身に付けて学校現場や地域における様々な課題の解決に向けてリーダーとして取り組める教員を養成することを目的としています。

本コースの目的は、現代の学校運営において課題となっている地域連携の在り方や学校の危機管理に対する対応、さらには学校全体における教育課程の編成や校内研修の企画などの学校運営に関して、高度な実践力を身に付けることです。本コースでは、経験的な実践知に加え、学校運営全体に関して、教育学の諸理論及び関連分野の知見に基づいた幅広い視野と学校の社会的機能に関する深い理解のもとに、学校運営の実践的指導力のある教員の養成を目指します。

本コースには、現職教員のみを受け入れます。学校内はもちろんのこと、地域の学校も含めて、教育力の向上に貢献することのできる学校運営面でのリーダーとなる教員を養成します。

先輩からの メッセージ



平成26年度入学
桑原 亮一
(中之条町立中之条中学校：学校運営コース)

学校運営コースでは、1年目に「学校経営」「危機管理」「カリキュラム」「学校評価」などに関する内容について学びました。学校現場で、日々生徒と対峙し業務にあたっている自分にとっては、学校教育の法的位置づけや行政との関わりなど、どれも現場では考えたこともない内容で正直戸惑う場面もありました。しかし、こういった学びの場がなければ、なかなか触れることのできない内容であり、どの授業もとても新鮮でした。研究者教員の方からの大局的かつ専門的な内容の授業、実務家教員の方からの経験に裏付けられた内容の授業、それぞれとても興味深く勉強させていただきました。

また、大学での授業では、座学だけでなく院生自ら提案する活動が多く、院生同士の学び合いの場でもあるように感じました。1コマの授業に対して準備を要する場合も多く、正直、時間的に余裕のない

場面もありましたが、主体的な学びが互いのできたように感じています。さらには、「地域連携」「危機管理」等に関しての先進校や教育関係機関への視察に行くことができたことも貴重な体験となりました。

学校運営コースにおける課題研究のテーマに関しては、「校内研修の進め方」「学年経営」「保護者・地域との連携」「カリキュラム開発」「幼小、小中、中高の連携」「教職員の多忙感の解消」など、多岐にわたったテーマが考えられますが、置籍校のニーズにあった課題を考えられるとよいと思います。学校運営コースの実践は、2年目の勤務校の学校、学年の先生方の理解、協力が必要不可欠だからです。研究のテーマは、入学前から考える必要がありますが、1年次に変更しても全く問題ありません。自分の興味関心、学校のニーズに合致したテーマを探し、研究していけるとよいと思います。



専任教員の研究概要

教員紹介

専門職学位課程は、研究者教員と実務家教員から構成されています。研究者教員は、教育経営学・教育社会学・教育方法学・発達心理学・学習心理学・教育心理学など、教育学や心理学のバックグラウンドを持っています。実務家教員は、校長として活躍したり、教育委員会で教育行政に携わってきた、豊かな経験を有しています。また一部の授業は、教育学部等の教員が「協力教員」として担当しています。

○ 研究者教員

研究の概要

高橋 望

【教育行政学・教育経営学】

自律的な学校経営、それに基づく学校ガバナンスの在り方について研究を進めている。また、諸外国における教育実践について関心を持ち、日本との比較検討を行っている。

山崎 雄介

【教育内容・方法学】

教育内容編成、授業づくりについての研究を活かし、校内研修の改善や教科横断的領域（キャリア教育等）のカリキュラム開発をテーマとする院生諸氏と共に課題研究にとりくんでいる。また近年は、「教育改革」のなかでの学校像やそこでの教育課程のあり方、学校・教員の評価などにも関心を持っている。

新藤 慶

【教育社会学】

地域社会と教育の双方向の規定関係について研究している。特に、在日ブラジル人の教育・保育を対象に、地域社会の国際化が学校に与える影響や、子ども同士の交流が地域社会にもたらす意味の解明に取り組んでいる。

三澤紘一郎

【教育哲学】

動物性と規範性が同居する人間存在を、近年の分析哲学の展開を手掛かりとしながら攻究している。特に、知識、理性、自然をめぐる議論から、人間の生における「教育」概念をとらえなおす試みに関心をもっている。

大島みずき

【発達心理学】

幼児期から児童期の子どもの社会性の特徴と、その発達について研究を行っている。また、園のシステムの中における幼児の仲間関係の発達についても検討している。

音山 若穂

【発達社会心理学】

児童期から青年期にかけての対人関係や、情動を中心とする心理的ストレス理論に基づく対人ストレスとその対応、ソーシャルサポートとの関連について対人社会心理学を基盤として検討している。

佐藤 浩一

【学習・認知心理学】

日常生活の中での認知機能について検討している。教授学習を促進する要因、集団での問題解決、エピソード記憶（自伝的記憶）などを主に検討している。





山口 陽弘

【人格・認知心理学】

幅広く教育全般に関する評価活動をより効率よく、正確に行うための研究を、教育心理学、認知心理学、心理統計学などの理論的知識を背景として行っている。外国籍児童への補償教育などの各種実践的研究にも、研究領域を拡げて活動している。

深谷 達史

【教育心理学】

学習内容の理解を促し、メタ認知や学習スキルを育成する教育活動のあり方を検討している。小学校から大学まで幅広い教育課程を対象に、実験や調査による実証的研究および大学における自らの授業も含めた実践的研究によるアプローチを用いて研究を進めている。

○ 実務家教員

研究の概要

矢島 正

【学校運営】

教育課程管理をはじめとして、児童生徒指導、家庭・地域社会との連携、進路指導、特色ある学校づくり、施設・設備の充実など総合的な学校運営の在り方について、具体的な事例を基に実践的な考察を深めている。

懸川 武史

【学校教育相談】

学校教育相談における問題を、教師が自己課題としてとらえて解決することを、ケース研究、ワークショップにより支援していく。また、予防・開発的な観点からは、ピア・サポートモデルの循環的仮説生成－検証過程を、学校教育相談上の課題解決事例によりモデルを検証し研究を進める。

田村 充

【学習指導】

児童生徒が学ぶとはどういうことなのか、教師が教えるとはどういうことなのかを具体的な実践を通して検討している。特に、どうすれば、学校での学びが児童生徒のその後の生活の中で生きて働く力となるかについて、認知心理学の研究成果をもとに検討していく。

石川 克博

【学習指導】

児童生徒の学習指導に関する実践的研究、学校経営的な視点をふまえた児童生徒への支援のあり方等について取り組んでいる。

岩澤 和夫

【学校運営】

算数科を中心としたカリキュラム、指導方法の改善・開発、学力や道徳性の向上をめざした学校体制づくり、保護者・地域との連携などについて実践的に研究している。

立見 康彦

【生涯学習・授業設計】

社会教育施設や学校における生涯学習の在り方について実践的に研究している。また、生涯学習や視聴覚教育・評価などの観点を中心とした授業設計について取り組んでいる。



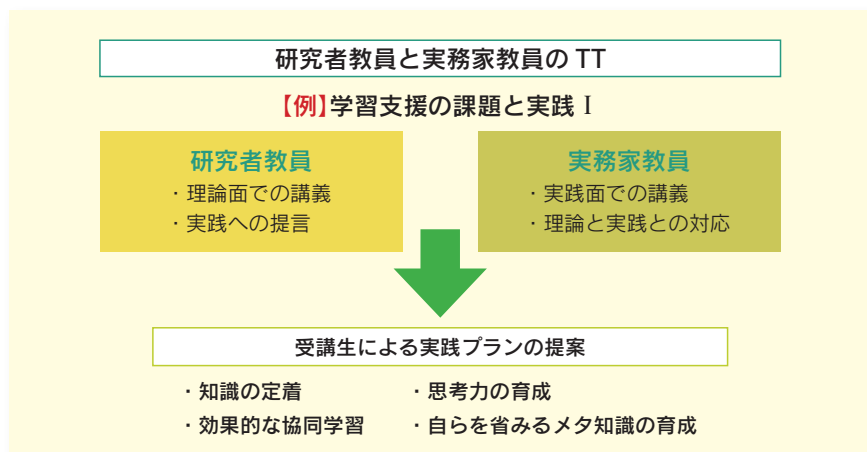
カリキュラムの特色

特色

① ▶ ティーム・ティーチング

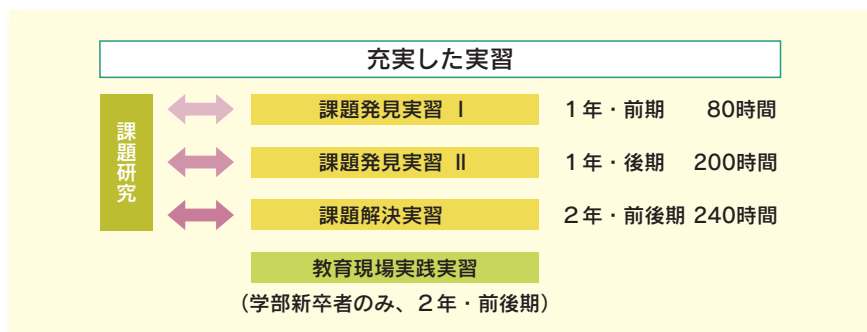
大半の科目と研究指導を研究者教員と実務家教員とのチーム・ティーチングで実施し、「理論と実践との往還」をカリキュラムのすべての範囲に浸透させています。

一例を挙げると、「学習支援の課題と実践Ⅰ」という授業では、例えば「子どもの知識の定着を促すにはどうすればよいか？」という問題に対して、研究者教員からは認知心理学・学習心理学・教育心理学の理論や研究にもとづく説明が提起され、実践への提言がなされます。それに対して実務家教員からは、この問題に関わって、児童生徒の実態、学習指導要領のなかで「知識の定着」がどう位置づけられているか、そのためにはどのような教材や教授法の工夫があるか、あるいはこうした工夫は、理論面での内容とどう結びつくか、といった解説が提示されます。受講生は、理論と実践の両面をふまえて実践プランを提案します。



② ▶ 充実した実習

1年次に280時間、2年次に240時間、計520時間の実習を設定しています。多くの教職大学院では、現職教員は実務経験をもって実習が一部免除される仕組みになっています。しかし本専攻では実習免除がありません。それは、教職大学院における実習は通常の実務経験を積み重ねることではなく、自らの実践を理論的な見地から問い直し、その上でより有効な実践や問題解決方法を提案する機会と捉えているからです。



【課題発見実習Ⅰ】

1年前期の【課題発見実習Ⅰ】は、4つの附属学校園で2日間ずつ行われます。附属学校園を活用することで、3歳から18歳までの健常児及び障害児の発達を理解するとともに、校種を越えた学校教育全体のつながりを把握し、学校教育の全体構造の理解を深めることが可能になります。



課題発見実習Ⅰ

附属幼稚園(2日)

附属小学校(2日)

附属中学校(2日)

附属特別支援学校(2日)

■ ねらい

・ 3歳から18歳までの健常児及び障害児の発達を理解する。

・ 校種を越えた学校教育全体のつながりを把握し、学校教育の全体構造の理解を深める。

先輩からのメッセージ



平成27年度入学
吉野 章子
(高崎市立片岡小学校：
児童生徒支援コース)

6月に2日間ずつ群馬大学教育学部附属4校園で課題発見実習Ⅰを行いました。授業参観、学校経営や校内研修に関する講話を中心とした内容でした。実習で体験したこと感じたことを簡単に紹介したいと思います。

特別支援学校では、中学部、高等部の就業体験の参観や配属クラスでの授業参加を通して、児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握したきめ細やかな支援を学ぶことができました。中学校では、各学年の授業、校内弁論大会、休み時間の学友会活動(生徒会活動)を参観しました。放課後にはワークショップ型授業研究会に参加し、効率的で効果的な研究会の在り方を体験することができました。小学校では、教師の専門性を生かした授業や、教科の系統性を意識した授業がされており、6年間を通して積み上げていく指導の重要性を改めて感じました。幼稚園での実習は、小学校へ入学してくる子どもたちが、ど

のような環境で学んできているのかを知るとも有意義な2日間でした。主体的に学ぶ態度を身につけて欲しいという願いはどの校種でも共通したものだと思います。そのためには、環境から学ぶことのできる「場」づくりと、子どもの行動から内面を推し量る教師の児童理解の姿勢がいかに大切であるかを幼稚園実習から強く感じました。

4校園の実習は、校種を越えた学校教育全体のつながりを学ぶよい機会だと思いました。特に勤務経験がない校種での実習は、自らの指導を振り返り、新しい視点を獲得の刺激となりました。教師としての自分自身の課題や勤務校の課題を発見する上で意味のある実習であったと感じています。各校種の基本的な知識を事前にはしっかりと理解して実習に臨み、現場の先生方と意見交換する時間をもう少しもつことができると、更に実りのある体験になるのではないかと思います。

【課題発見実習Ⅱ】

1年後期の【課題発見実習Ⅱ】は、県内の協力校において、小学校、中学校それぞれ2週間ずつ行われます。異校種での実習を経験する中で、新たな気づきと自らの課題研究につながる視点を獲得し、検討する姿勢を養います。



課題発見実習Ⅱ(1年次9月～10月)

1グループ：2～3名

A小学校(12日間)

B中学校(12日間)

連携協力校18校

先輩からの
メッセージ



平成27年度入学
菊地 雄真
(ストレートマスター：
児童生徒支援コース)

課題発見実習Ⅱでは、小学校・中学校それぞれ12日間ずつ実習を行いました。学部時代の教育実習と比較すると次のような違いがあり、またそれがこの実習の良さだと捉えています。

1点目は、明確なテーマを持って授業実践に取り組めたことです。課題研究で設定したテーマを実習校に理解してもらえたため、テーマに沿った授業をさせていただくことができました。前期の課題研究で準備してきた指導案について、実践する場をいただき、今まで見えなかった課題を発見することができました。また、見つけた課題と成果から研究ビジョンがはっきりし、実習を終えてからは自分の研究が深まったことを実感しています。

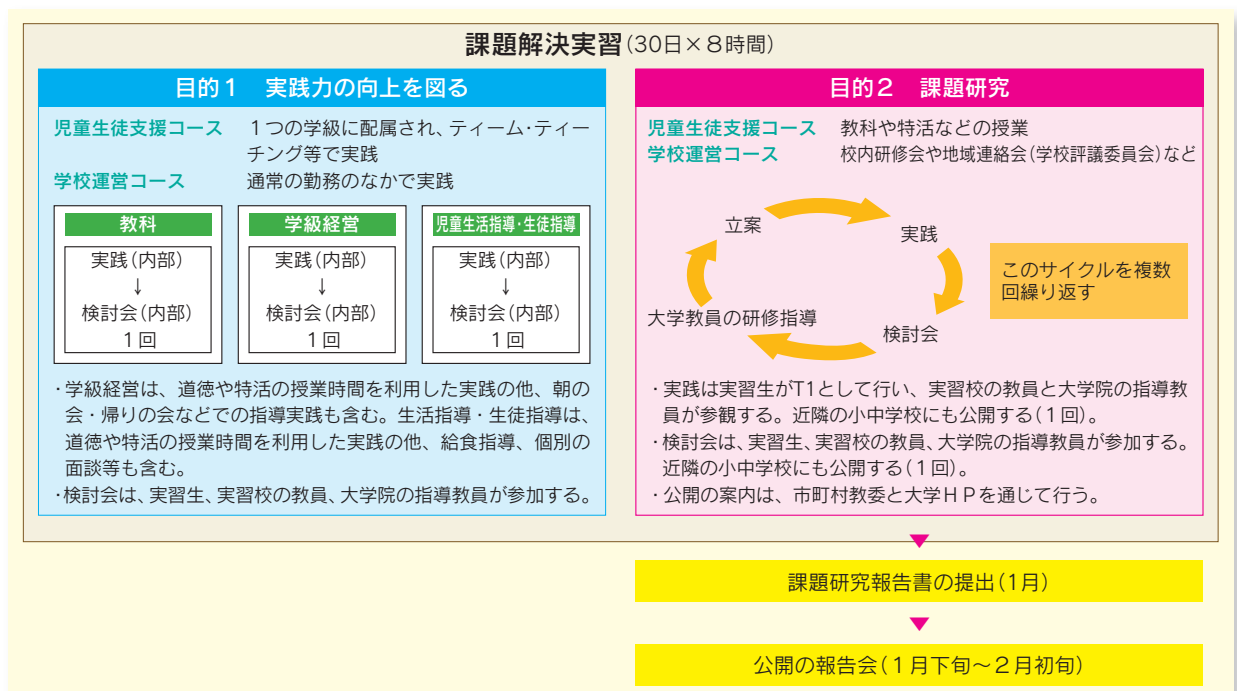
2点目は、現職の先生とペアで実習を行えたことです。一緒に実習校に配属され、指導案や模擬授業

などご指導いただきました。さらに実習校の先生も指導して下さるので、かなり手厚い指導となり、学部時代の実習以上に身に付くことは多かったです。現職の先生からは授業場面に限らず、部活動や学校行事、放課後に一緒に活動する中で様々なものの見方を教えていただきました。学校の見方、学級の見方、実習校の先生の動きの見方、子どもの見方など、現場経験のない私が持ち得ない視点を持って実習に臨むことができ、視野が広がりました。

最近、複数の先生から「前期と比べると格段に成長したね」と言ってくれたことがありました。私自身、この実習が自分を大きく成長させてくれたと思っています。恵まれた環境で実習を行えたことに感謝しながら、この経験を次に生かす努力を続けていきます。

【課題解決実習】

2年次の【課題解決実習】は、のべ240時間が設定されています。学部新卒者は協力校で、現職教員は自らの勤務校で、教科指導・学級経営・児童生徒指導の実践力の向上を目指します。課題研究にかかわる実践検討会は公開で実施され、実習校以外からも参加が可能です。院生一人につき2名の指導教員（研究者教員・実務家教員）が、実習期間中に実習校を訪問し、のべ20時間以上の指導にあたります。



先輩からの
メッセージ



平成26年度入学
上田 剛
(前橋市立広瀬中学校：
児童生徒支援コース)

教職大学院2年次の課題解決実習は、各自が1年次に設定した課題研究のテーマを実践していくものです。現職の教員は、1年次は現場を離れての大学院での学びが中心となりますが、2年次は現場に戻って実践に取り組みます。そのため、通常の職務をこなしながら、課題研究を進めていくこととなります。生徒指導や部活指導をしながらの実習は、最初は辛いと感じることもありました。しかし、実践を重ねていくうちに、研究を楽しむことができるようになっていく自分がありました。

その理由として、まず、教科指導の専門性の高まりを実感できたことが考えられます。課題解決実習では、10回以上にもわたる巡回指導で、大学院の先生方に直接授業を参観していただきました。授業研究会では、研究者教員の専門的な理論に基づいた指導と、実務家教員の現場での経験に裏付けられた実践的な指導を受けることで、授業改善の具体的な道筋が見えてきました。そして、授業のアイデアが膨

らみ、すぐに実践につなげることができました。指導→改善→実践のサイクルを半年以上にわたり繰り返していく中で、教科指導の専門性が高まり、教職大学院のテーマである「理論と実践の融合」に近づくことができたと感じています。

また、生徒の成長を実感できたことが研究の大きな原動力となりました。研究では様々な手法で効果検証を図ります。実践後に全国や群馬県の調査問題に取り組みさせたところ、学力向上が課題の勤務校において、平均を大きく上回る成果が見られました。しかし、何より生徒の授業に向かう姿勢や思考力・判断力の向上を肌で感じる事ができたことは、教師としてこの上ない喜びでありました。

忙しい学校現場の中での研究は大変なものです。しかし、現場の中だからこそ教師が本当に必要な研究ができるのです。年間を通して一つのテーマを研究していく教職大学院の実習は、それを実現してくれる貴重な経験だと思います。

先輩からの
メッセージ



平成25年度入学
小貫 優嘉
(前橋市立大胡東小学校：ストリートマスター：児童生徒支援コース)

課題解決実習では、1年次に研究を進めていた自分の研究課題を、実際の学校現場で実践していきます。私は4月から12月まで、学級の指導のお手伝いをしながら、自分の研究を実践させていただきました。

1年目の課題研究では、多くの文献に触れる機会がありますが、児童・生徒の実態など見えない部分が多く、いわば「机上の空論」の状態です。学校現場で、子どもたちと一緒に学習に取り組み、協力校の先生方からもアドバイスをいただくことで、実現可能な形が具体的にになっていきます。課題研究担当の大学教員が何度も協力校に訪問していただき、児童・生徒の実態にあった実践になるように導いてくださいます。さらに週に1回は大学

院での指導もあります。理想だけだった自分の授業が実現していく過程は、一筋縄ではいかないこともあります。それだけに大きな達成感を得られました。

実習中は、担当クラス以外にも、様々な学年の授業も参観させていただくことができました。行事や事務作業のお手伝いもさせていただき、課題研究のみならず、教員として「働く」ことについても大変勉強になりました。

自分の「やりたい」を形にできたこの体験は、教員となった今、私の人生の中で大きな財産となっています。

先輩からの
メッセージ



平成25年度入学
増田 和子
(前橋市立城南小学校：
学校運営コース)

教職大学院を終えて3年経った今、研修主任2年目の私を支えているのは、本校職員のチーム力と、教職大学院で学んだ2年間の理論と課題解決実習です。特に大きな主任経験のなかった私が、文部科学省英語教育強化地域拠点事業の指定や前橋市タブレットパソコン活用授業実践研究指定を受け、中心となって研修の計画を立てたり、ワールドカフェ・ワークショップ形式の研修方法を積み重ねたりして、なんとか研修を進めてこられたのは、教職大学院の経験あってこそ実現できたと言っても過言ではありません。そう言い切ることができるのは、なぜなのでしょう。

私が学校運営コースの一人として取り組んだ課題研究は、「ビジョンを共有することで実現する学校組織の活性化～教師間コミュニケーションで作成する自己申告書の作成・活用を通して～」というものでした。学校運営という内容から、もちろん研究に一人で取り組むことはできず、管理職をはじめ、各学年主任や当時の教務主任・研修主任と相談をし、

連絡・調整をしながら進めていきました。課題研究を進める中で、大切な段取りや打ち合わせ、協力体制の作り方や職員への声のかけ方などを学びました。自校の多くの先輩方や後輩たちとコミュニケーションをとることを通して、様々な世代の様々な考え方を学びました。この経験が、今の研修主任としての私を育ててくれたのです。

教職大学院2年目の、勤務と併行して課題解決実習を進める1年間は、決して楽ではありません。しかし、1年目の純粋な学生生活において自校以外の多くの先生方と研究にこそんだことを糧に必ず乗り越えられる1年です。そして、自校の先生方と今までにない関わりを持つことができる1年でもあります。そんな教職大学院に行く機会を与えてくださった方々に、一緒に学生生活を送った仲間たちに、課題解決実習を支えてくれた自校の先輩方や後輩に、少しでも恩返しのできる自分でありたいという思いが、今自分の活力の礎となっています。

③ ▶ 実習と課題研究の連動

実習は、課題研究とも連動しています。1年前期の課題発見実習ⅠからⅡへと進むなかで学生は自らの課題研究のテーマを明確化します。そして2年次の課題解決実習では、自らが設定した課題を解決する方策を計画し、実践し、それをさらに評価・考察し次の計画へとつなげます。最終的には課題研究報告書を作成し、学内外の方を招いた報告会で報告することが、大学院の修了要件となっています。

なお、学部新卒者等の場合、課題解決実習の30日間だけでは子どもたちとの関係づくりなどが難しいため、その前後にも現場に入ることになります。その部分については、「教育現場実践実習」として単位化しています。

■これまでの修了生の課題研究テーマ(例)

児童生徒支援コース

- ・ 中学校国語科における叙述に即した読みを身につけさせるための指導の工夫
－ 質問作りを基盤とした学習方略の使用を通して－
- ・ 算数科における問題解決促進のための学習支援の工夫
－ 文章題解決の4つの下位過程に即して－
- ・ 情報を関連付けて読む力を育てる小学校国語科学習指導
－ スキーマの可視化により文章の全体像と部分とをつなぐ指導を通して－
- ・ 小学校における情報モラル教育の実践研究
－ 下級生へ向けた新聞作りの活動を通して－
- ・ つくる喜び、達成感を味わうことができる絵画指導
－ 図画工作科における絵画指導の工夫－

学校運営コース

- ・ 教員が抱える職務上の課題解決のための方策
- ・ 教師の意識的な実践を促すキャリア教育の推進
－ キャリア教育の視点に立った総合的な学習の時間の再構築を通して－
- ・ 地域づくりの担い手育成をめざす総合的な学習の時間のカリキュラム開発
－ 「下仁田ジオパーク」を活用した実践を中心にして－
- ・ 教師の授業力向上のための手立ての工夫
－ 教師全員が参加する校内研修と子ども全員が参加する授業を目指して－
- ・ 組織的な家庭学習指導の確立を目指す推進体制づくり
－ 教科担任、学級担任、保護者の連携を通して－



課題研究の成果報告は、定期的に全て公開で行います。1年次の7月（前期終了時）に第1回目の中間報告会、1月下旬～2月初旬（後期終了時）に第2回目の中間報告会を実施します。

2年次の1月には、群馬県教育委員会、群馬県PTA連合会、教育実習校関係者、他大学の教職大学院関係者など、県内外から多くの参加者を募り、これまでの研究成果を最終まとめとして報告します。そして、児童生徒支援コース、学校運営コースそれぞれ1名の優秀者を選出します。さらに、毎年12月に開催される「日本教職大学院協会研究大会ポスターセッション」では、毎回前年度の修了生から1名が課題研究の成果および修了後の活用について報告しています。

④ ▶ 多文化共生教育

東毛地区をはじめとして、県内では日系南米人等の外国籍児童生徒が通う公立学校が増えています。そうした県内の状況に鑑み、多文化共生マインドを育成するため、多文化共生教育を必修科目としています。座学だけでなく、大泉町など外国籍児童が多く在籍する公立学校へのフィールドワークを通じて、担当教諭・指導助手と質疑応答したり、院生が考案した研究授業を日本語教室で試行したりしています。



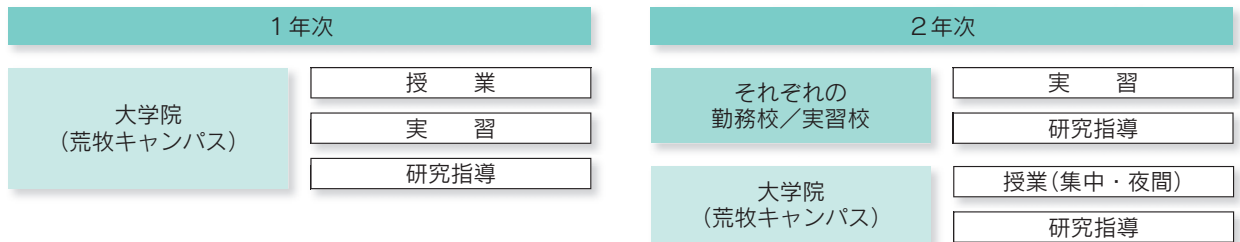
専門職学位課程の2年間

2年間の流れ

修業年限は2年間であり、1年目は基本的に授業を受けながら特定の期間に実習を行います。

2年目については、現職教員は置籍校に戻って勤務に従事しながら課題研究をまとめます。一部夜間、集中講義など大学の授業を受講したり、大学で研究指導を受けたりすることもあります。

学部新卒者は実習校(県内の連携協力校)で実習を行いながら課題研究をまとめるとともに、一部集中講義など大学の授業を受講したり、大学で研究指導を受けたりすることもあります。



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年次	・入学式 ・ゼミ決定 ・前期授業開始		・課題発見 実習Ⅰ	・課題研究 中間報告会①		・課題発見 実習Ⅱ		・後期授業 開始				・課題研究 中間報告会②
2年次	← 課題解決実習(年間) →							← 実践検討会 →		・課題研究 報告書 提出	・課題研究 報告会	・学位記 授与式

■ 写真でたどる2年間

① 1年次



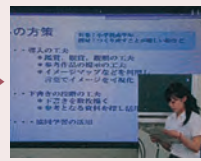
1年次前期～大学で理論を学びます。



交流もじっくり深めます。



課題発見実習Ⅰ(6月)
多様な校種の子どもと教育の実際を学びます。



中間報告会①(7月)
研究課題と解決の方策を検討します。



課題発見実習Ⅱ(9月)
自分の研究課題を意識しつつ実践します。



中間報告会②(2月)
4月からの研究計画を報告します。質問にも堂々と答えます。

② 2年次



課題解決実習(4～12月の間で計30日)
自身の実践を通じて課題を解決します。



実践検討会(10～12月ごろ)
勤務校・実習校で授業公開と研究報告を行います。



課題研究報告会
(1月下旬～2月初旬)
全院生が一堂に会し、公開で研究成果を報告します。



学位記授与式(3月)
修了者には教職修士学位が授与されます。正副代表者は正装で式に臨みます。

就職・連携・学生支援・学生交流

就職

■ 進路

現職教員はすべて教育現場（教育委員会等含む）に復帰しています。創設後2014年度までの修了者73名中の現在の状況は、教諭55名、管理職（教頭）3名、管理主事3名、指導主事12名となっています。

同時期の学部新卒者の修了者20名中、教員（臨時含む）19名、教員以外の進路1名となっており、教員志望の入学者についてはすべて学校現場で勤務しています。

修了者の活躍は、読売新聞「教育ルネサンス」、朝日新聞「花まる先生」などでも紹介されています。また、群馬県教育総合センター主催の「ぐんま教育賞」における入賞者も複数でています。



連携

■ 群馬県および市町村教育委員会、学校現場との連携

本課程のスタッフは、国立大学法人群馬大学と群馬県教育委員会の連携に係る協議会（教育改革・群馬プロジェクト）の部会での研究やシンポジウム、実践交流会等において重要な役割を果たしています。また、学生の実習校・勤務校にとどまらず、県内のさまざまな地域において、校内研修支援等の活動も独自に行っており、県および県内市町村の教育委員会、学校現場との連携を積極的に進めています。こうした活動は、大学院での授業や学生指導にもフィードバックされています。



学生支援

■ 1人ひとりのニーズに応じた学生支援

専門職学位課程での学生生活が充実するよう必要な情報提供等に努めています。学部新卒者に対しては、個別のニーズに応じて教員採用試験対策を行ったり、臨時的教職員の任用等について教育行政機関へ紹介するなどの支援を行っています。また、現職教員に対しても教員生活のキャリア全体を通しての職能成長に関わる相談やワーク・ライフ・バランスのアドバイスなどを行っています。また、様々なハラスメント防止についても独自のガイドラインを作成して配慮しています。

学生交流

■ 学生間のネットワーク

教職大学院に籍を置いた学生は、開設以来、100名を超えています。こうした仲間が大学院修了後も互いに教育実践を交流し合ったり、教育情報を深め合ったりすることを目的として「やまなみ倶楽部」がスタートしました。県内各地に学びを共にし、実践を共有できる仲間がいることは、教職大学院の大きな強みです。

「やまなみ」とは、教育学部のA棟5階の教職大学院の教室から目にする事が出来る群馬の山脈（やまなみ）を総称しています。「倶楽部」は研究や教育実践を共有し、常に高め合える学びのサロンを目指して命名されました。

現在「やまなみ倶楽部」は、2年次生の「課題研究報告会」の開催に合わせて、「総会と懇親会」を開催しています。今後は更に、赤城山のごとく、人と実践研究のすそ野を広げられるようにしていきます。



交通アクセス

群馬大学教育学部・教育学研究科(荒牧キャンパス)：JR両毛線、前橋駅にて下車、北方へ8Km

バス：JR前橋駅北口2番乗り場(関越交通バス)

- 群馬大学荒牧經由渋川駅行 ▶「群馬大学荒牧」下車(所要時間約28分)
 - 群馬大学荒牧經由渋川市内循環渋川駅行
 - ▶「群馬大学荒牧」下車(所要時間約28分)
 - 渋川駅行 ▶「前橋自動車教習所前」下車(所要時間約25分+徒歩10分)
 - 渋川市内循環渋川駅行
 - ▶「前橋自動車教習所前」下車(所要時間約25分+徒歩10分)
- ※渋川駅から関越交通バス[前橋駅行]に乗車した場合も同じです。

バス：JR新前橋駅東口乗り場(関越交通バス)

- 群馬大学荒牧經由スポーツセンター行
 - ▶「群馬大学荒牧」下車(所要時間約33分)
- ※JR群馬総社駅からは公共交通機関がありませんので注意してください。

編集・発行 ■ 群馬大学教育学部広報委員会
委員長 ■ 喜多村徹雄
委 員 ■ 吉野浩之・茂木一司・田中一嘉・片柳雄大・富澤森幸
須藤忠義・加藤美式

群馬大学教育学部 教務係
〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2
TEL.027-220-7223





国立大学法人 **群馬大学大学院教育学研究科**

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2 TEL.027-220-7223

教育学部ホームページ <http://www.edu.gunma-u.ac.jp/>

群馬大学ホームページ <http://www.gunma-u.ac.jp/>

